

山田町所在

とらくえ えのきだ
虎崩・榎木田遺跡

高崎町所在

くろせと かみじのぼる
黒勢戸・上示野原遺跡

国営都城盆地農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

2001

宮崎県埋蔵文化財センター

山田町所在

とらくえ えのきだ
虎崩・榎木田遺跡

高崎町所在

くろせと かみじのぼる
黒勢戸・上示野原遺跡

国営都城盆地農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

2001

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、九州農政局の依頼を受け、平成5年度より都城盆地に所在する虎崩・榎木田遺跡および黒勢戸・上示野原遺跡の発掘調査を進めてまいりました。

いずれも、さほど大規模な面積の調査ではありませんが、埋葬に関わると見られる縄文時代の遺構や古墳時代の竪穴住居跡が検出され、また多量の遺物が出土するなど、大きな成果を上げることができました。

これらの成果が、学術研究のみならず、生涯教育の場で活用され、文化財保護行政の理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたりましてご協力いただいた関係各機関や地元の方々、ご指導・ご助言をいただきました先生方に、厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 矢野 剛

例 言

- 1 本書は、九州農政局の国営都城盆地農業水利事業に伴ない実施された、宮崎県北諸県郡山田町所在の虎崩・榎木田遺跡、高崎町所在の黒勢戸・上野原遺跡の調査報告書である。
- 2 本書の執筆は、第Ⅰ章第1節は宮崎県文化課埋蔵文化財係長 石川悦雄が、第Ⅰ章第2節と第Ⅱ章は宮崎県埋蔵文化財センター主査 吉本正典が、第Ⅲ章は宮崎県埋蔵文化財センター主任主事 高橋浩子が行った。
本書の編集は、高橋浩子が行った。
- 3 遺構の実測等は各調査員が行なった。また、遺物の整理は宮崎県埋蔵文化財センターにて、整理作業員の補助のもと、各調査員が行なった。
- 4 土層断面および土器の色調については「新版標準土色帖」に拠る。
- 5 本書に使用した方位は、磁北である。座標は国土地院第Ⅱ系に拠る。レベルは海拔絶対高である。
- 6 本書に使用した写真は各調査担当者が撮影し、空中写真については業者に委託して撮影した。
- 7 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図をもとに作成した。
- 8 黒勢戸遺跡は、諸届けの段階では「黒瀬戸遺跡」と表記していたが、本来の字名を遺跡名とする。
- 9 上野原遺跡は、昭和50年に企業誘致の為に敷地造成工事に伴う発掘調査が行われた地点を第1次、今回の調査地点を第2次とする。
- 10 記録類や出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 虎崩・榎木田遺跡の調査	
第1節 調査の概要	2
第2節 層序	2
第3節 遺跡の位置	3
第4節 遺構と遺物	
1. 「埋甕」遺構	6
2. 出土土器	8
3. 出土石器	18
第5節 まとめ	25
第Ⅲ章 黒勢戸・上示野原遺跡の調査	
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	33
第2節 調査の経過と概要	35
第3節 層序	39
第4節 遺構と遺物	
1. 黒勢戸遺跡	
(1) 縄文時代の遺物	40
(2) 古墳時代の遺物	40
(3) 時期不明の遺構	
a. 掘建柱建物跡	42
b. 溝状遺構	43
2. 上示野原遺跡	
(1) 弥生～古墳時代の遺構と遺物	
a. 竪穴住居跡	43
b. 包含層出土の遺物	48
(2) 時期不明の遺構	
a. 掘建柱建物跡	48
第5節 まとめ	48

挿図目次

虎崩・榎木田遺跡	
第1図 虎崩・榎木田遺跡位置図	3
第2図 調査区位置図	4
第3図 層位断面図(1)	5
第4図 層位断面図(2)	6
第5図 「埋甕」遺構実測図	7
第6図 「埋甕」遺構の深鉢形土器	8

第7図 包含層出土土器 (1)	9	第13図 包含層出土土器 (7)	15
第8図 包含層出土土器 (2)	10	第14図 包含層出土土器 (8)	16
第9図 包含層出土土器 (3)	11	第15図 包含層出土土器 (1)	16
第10図 包含層出土土器 (4)	12	第16図 包含層出土土器 (2)	17
第11図 包含層出土土器 (5)	13	第17図 包含層出土土器 (3)	18
第12図 包含層出土土器 (6)	14		
黒勢戸・上示野原遺跡			
第1図 黒勢戸・上示野原遺跡位置図	34	第6図 黒勢戸遺跡 溝状遺構	42
第2図 黒勢戸・上示野原遺跡 周辺地形図	36	第7図 上示野原遺跡 遺構分布図 及び基本土層図	44
第3図 黒勢戸遺跡 遺構分布図 及び上層柱状図	37-38	第8図 上示野原遺跡 竪穴住居跡	45
第4図 黒勢戸遺跡 出土土器実測図	40	第9図 上示野原遺跡 竪穴住居跡 及び包含層出土土器実測図	46
第5図 黒勢戸遺跡 1号~5号 掘建柱建物跡	41	第10図 上示野原遺跡 1号・2号掘建柱建物跡	47

表 目 次

虎崩・榎木田遺跡			
第1表 土器観察表 (1)	19	第5表 土器観察表 (5)	23
第2表 土器観察表 (2)	20	第6表 石器計測表 (1)	23
第3表 土器観察表 (3)	21	第7表 石器計測表 (2)	24
第4表 土器観察表 (4)	22		
黒勢戸・上示野原遺跡			
第1表 黒勢戸・上示野原遺跡土器観察表	50		

図 版 目 次

虎崩・榎木田遺跡			
図版1	26	図版5	30
図版2	27	図版6	31
図版3	28	図版7	32
図版4	29		
黒勢戸・上示野原遺跡			
図版1	51		
図版2	52		
図版3	53		
図版4	54		

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

九州農政局の国営都城盆地農業水利事業は、昭和50年代の地区調査、実施設計を経て昭和62年度から工事が始まったが、県文化課が埋蔵文化財協議を開始したのは平成元年度であった。水源となる木之川内ダムからほど近い高崎町、山田町から工事が進むため、両町の工事予定地を先行して分布調査を実施した結果、予定地周辺に高崎町で6遺跡、山田町で3遺跡の所在が確認された。

平成5年度の事業照会に対する九州農政局都城盆地農業水利事業所の回答により、二号幹線水路のパイプライン敷設工事が、山田町中霧島の虎崩遺跡、櫻木田遺跡地内で実施されることが判明し、平成5年2月に確認調査を実施した。調査により密度は薄いものの、縄文土器等が検出されたため、遺跡の取り扱いについて協議した。路線の変更等が困難であったため、平成5年7月6日付けの工事通知に対し7月19日付けで発掘調査の指示を行い、8月2日付けで「埋蔵文化財発掘調査負担契約書」を締結した。発掘調査は8月17日から開始され、現地における作業を10月22日に終了した。

高崎町大牟田の黒勢戸遺跡、上示野原遺跡は、平成6年に照会した平成7年度一号幹線水路事業予定地に所在した。両遺跡とも、既に近接地で高崎町教育委員会による確認調査が実施されていた。その所見に従い、平成7年3月27日付けの工事通知に対し、平成7年4月11日付けで黒勢戸遺跡については発掘調査を、上示野原遺跡については工事立会を指示した。発掘調査については平成7年6月2日付けで、都城盆地農業水利事務所長から県教育長宛に依頼があり、平成7年11月11日付けで「都城盆地農業水利事業埋蔵文化財発掘調査負担契約書」を締結した。

現地に於ける発掘調査は平成7年11月11日から開始し、黒勢戸遺跡遺跡は12月25日に終了した。当初立会であった上示野原遺跡では、住居跡等が確認されたため、事業者の理解を得て急速調査を実施することとし、12月26日から平成8年1月16日まで、正月休みを挟んで調査を実施した。

第2節 調査の組織

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長	高山 義孝 (平成5年度)	主幹兼埋蔵文化財第二係長	岩水 哲夫 (平成7年度)
	田原 直廣 (平成7年度)	埋蔵文化財第二係長	面高 哲郎 (平成5年度)
教育次長	八木 洋	調整担当	
	中田 忠	埋蔵文化財第二係主査	石川 悦雄
文化課長	甲斐 教雄 (平成5年度)	調査担当	主事 吉本 正典
	江崎 富治 (平成7年度)		(平成5年度 虎崩・櫻木田遺跡)
課長補佐	田中 雅文	主事	久木田浩子
			(平成7年度 黒勢戸・上示野原遺跡)

第Ⅱ章 虎崩・榎木田遺跡の調査

第1節 調査の概要

ここに報告を行なう虎崩・榎木田遺跡は、宮崎県北諸県郡山田町大字中霧島の字虎崩、および字榎木田に所在する。虎崩遺跡は台地の端部と斜面、榎木田遺跡はその下の低地にあり、本来、性格の異なる遺跡と見られるが、出土遺物の時代・時期が同じであり、後に触れるが、榎木田遺跡の出土遺物は、虎崩遺跡から流れ込んだ結果のものと考えられるため、一括して扱うことにする。

調査は、水路の掘削地、および付帯工事箇所に限定されたため、台地の上から斜面、そして低地に至る細長いトレンチを設定したに等しい状況となった。そこで、台地上の調査地区(字虎崩)をC地区、斜面の調査地区(字虎崩)をB地区、低地の調査地区(字榎木田)をA地区と称することにした(第2図)。

調査は、平成7年8月17日から同年10月22日までの期間実施された。

C地区は、平坦な台地の端部にあたることから、住居跡などの居住関連遺構が検出されるものと期待されたが、結果として、基盤の御池ボラ層の上位に黒色土が堆積する状況が確認されたが、目立った遺構は検出されなかった。また遺物の出土もごくわずかであった。ただし、調査区幅を考えると、集落跡の存在の可能性を消し去ることはできない。

B地区では、多量の縄文時代後期～晩期に属する土器や石器が出土している。そのほとんどが上位から流れ込んだような状況を呈していた。そのような中、1点のみ、正立の状態でごえられた深鉢形土器が確認された。これを「埋変遺構」と称することになっている。

A地区においても、多量の縄文時代後期～晩期に属する遺物が出土しているが、やはり流れ込んだ状況を示しており、生活の痕跡を捉えることはできなかった。

第2節 層序

基本層序は次の通りである。

- 第Ⅰ層 表土、現耕作土。客土されている箇所がある。またA地区では、下位に水田の床土が認められる。
- 第Ⅱ層 黒褐色土。概して薄い。
- 第Ⅲ層 褐色土。御池ボラ粒を含む。
- 第Ⅳ層 黄色味がかった褐色土。御池ボラ粒を含む。遺物を多量包含する。
- (Ⅳ下層) やや黄色味が強くなり、粒子の大きい御池ボラを含む。やはり遺物を多量包含する。
- 第Ⅴ層 御池ボラ層。霧島山系御池を噴出源とする火山堆積物。

傾斜地であるB地区ではとところどころ層序が横転するなどの乱れが認められる。



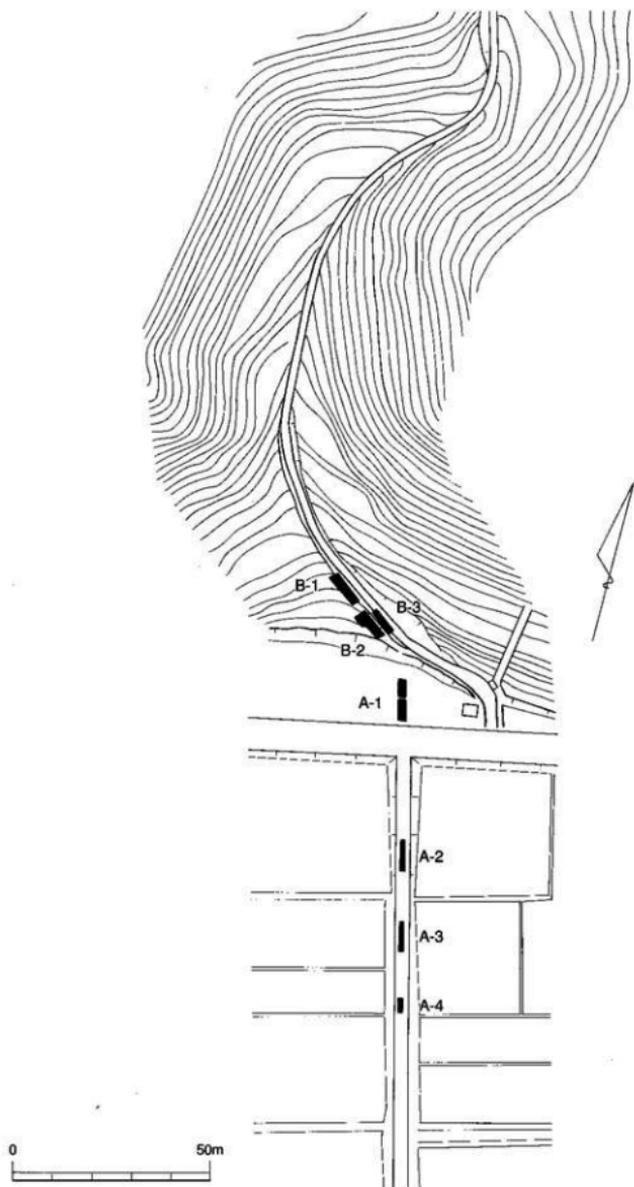
1 虎崩・榎木田遺跡 2 中村遺跡 3 池増遺跡

第1図 遺跡の位置 (5万分の1地形図「都城」より)

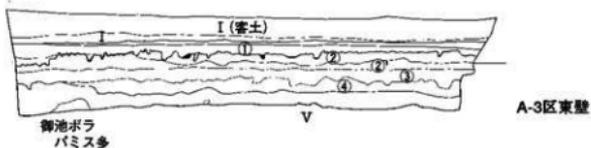
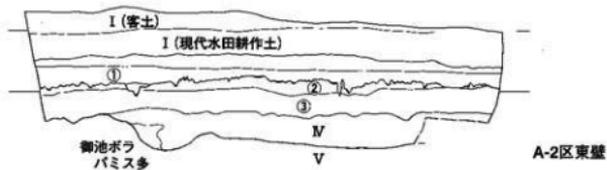
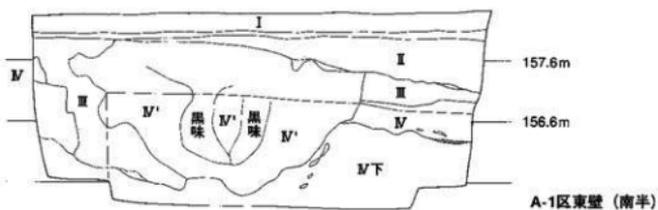
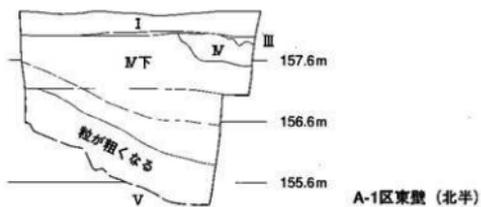
第3節 遺跡の位置

虎崩遺跡は、都城盆地の北縁部に近い宮崎県北諸郡山田町大字中霧島にある。付近は火山灰性の台地が広がるところで、「崩」の字が示す通り、台地端部は雨水の侵食でしばしば崩落し、時には災害も引き起こす。

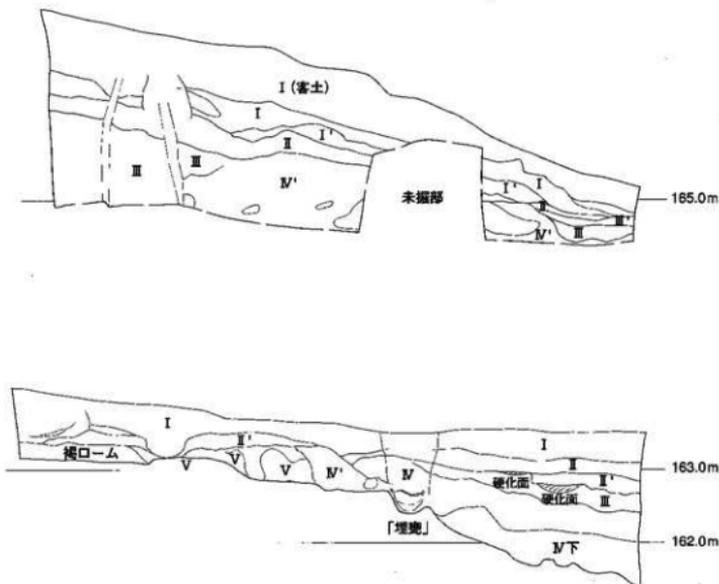
付近では発掘調査がさほど行われていないため、考古資料は十分とは言えないが、本遺跡に関連する縄文時代後期～晩期に関しては、中村遺跡での調査事例がある（『中村遺跡—山田町文化財調査報告書第1集—』山田町教育委員会 1983）。



第2図 調査区の位置 (1/1250)



第3図 層序 (1) (1/80)



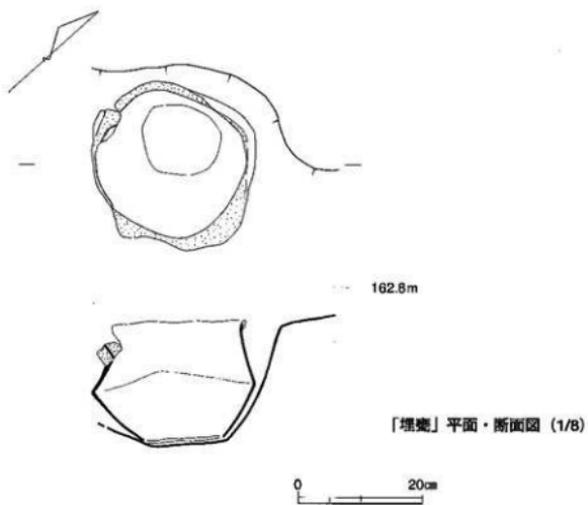
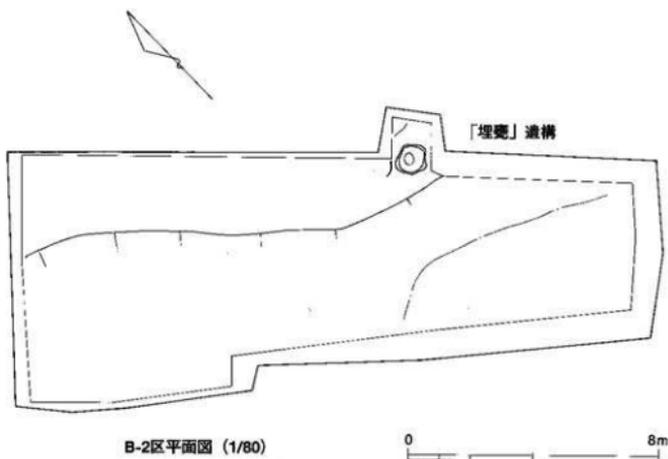
第4図 層序(2) (1/80)

第4節 遺構と遺物

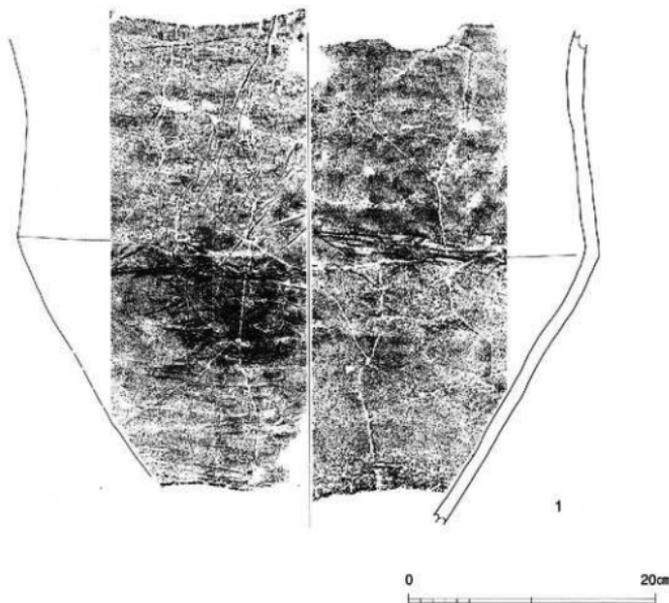
1. 「埋甕」遺構

B-2区の北西壁際で検出された。縄文時代後期～晩期に属する大形の深鉢形土器が、正立の状態で見えられていた。ただし、高位側の北側では掘り込みが確認できたものの、それ以外の部分では落ち際が見えられなかった。元来、斜面の高位側を切り込んで土器を据えたものであろうが、傾斜地であるため、しっかりとした土坑が在ったとしても南側の肩の部分が流失した可能性がある。

1が安置されていた土器である。口縁部を欠くが、これは後世の擾乱によるものか。胴部は屈曲し、おそらくゆるやかに外反し口縁部に至るのであろう。底部は焼成後に打ち欠かれている。



第5図 「埋甕」遺構



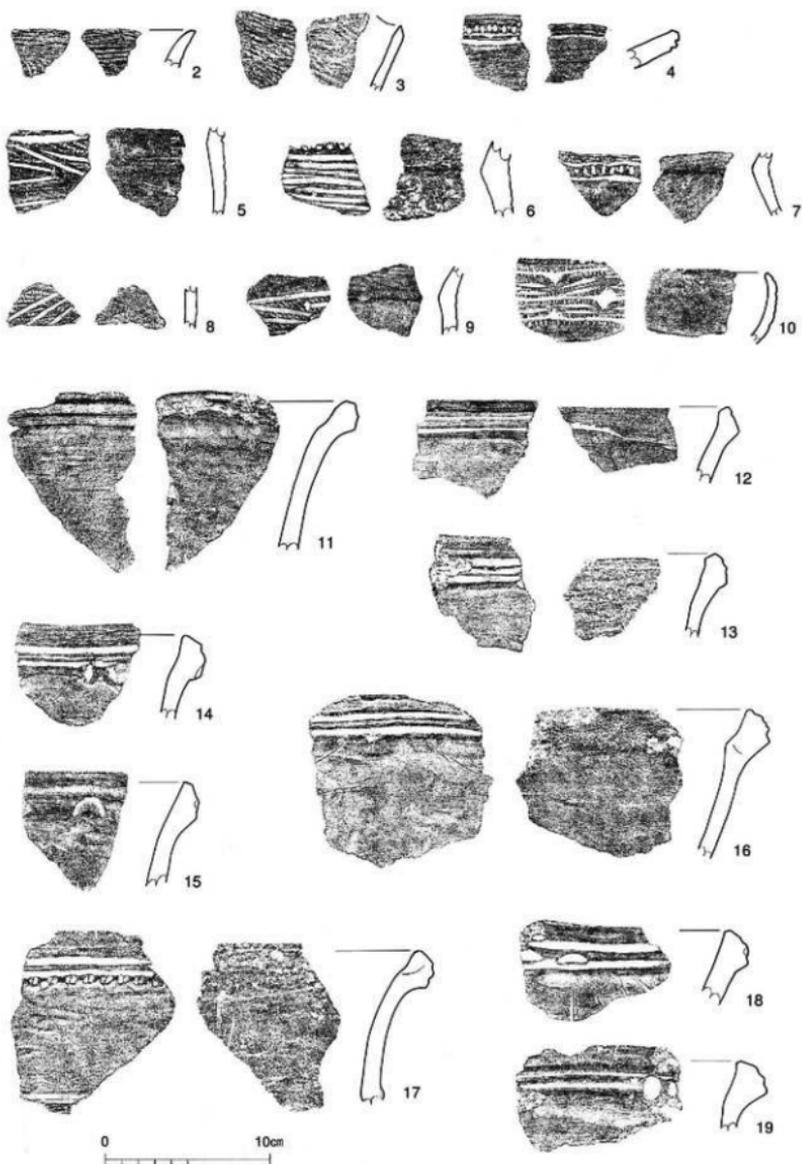
第6図 「埋甕」遺構の深鉢形土器 (1/4)

2. 出土土器

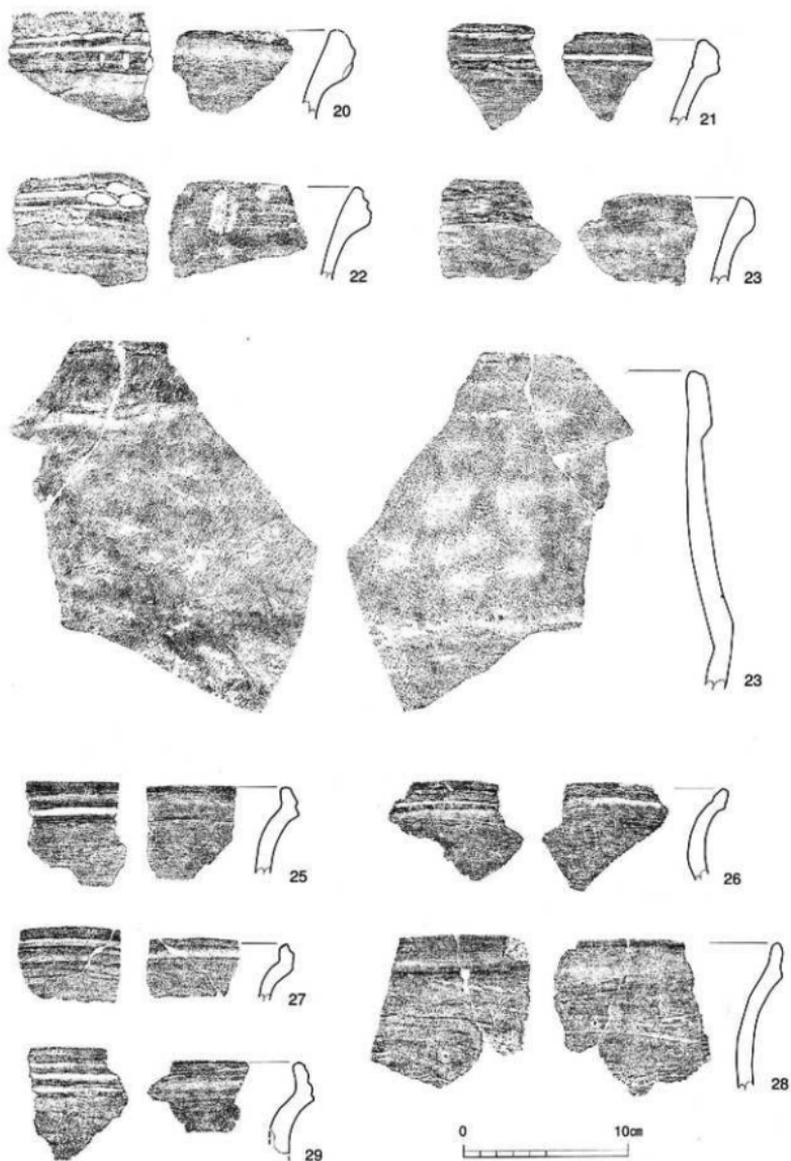
縄文時代後期から晩明にかけての土器が大量出土している。うち貝殻文系(2・3)、台付皿形?(4)磨消縄文系(5~9)の小破片を除くほとんどが、後期末~晩期初頭に属するものと見られる。器種は深鉢形(1~51)、鉢形(53~59)、浅鉢形(60~74)の各種が認められる。

その中で深鉢形土器は、Ⅰ…口縁部が肥厚するもの(11~24・43~45) Ⅱ…口縁部が内側に屈出するもので、多くは外面に沈線文を施す(25~37・39・40・46・47) Ⅲ…口縁部が緩やかに外反するもの(48・50・51)に大別できる。37はⅡの屈曲が緩くなったもの、49はⅠの肥厚が痕跡程度となったものか。54の沈線文は、滋賀里式系のそれを想起させるが、突帯の付く点など、疑問も多い。

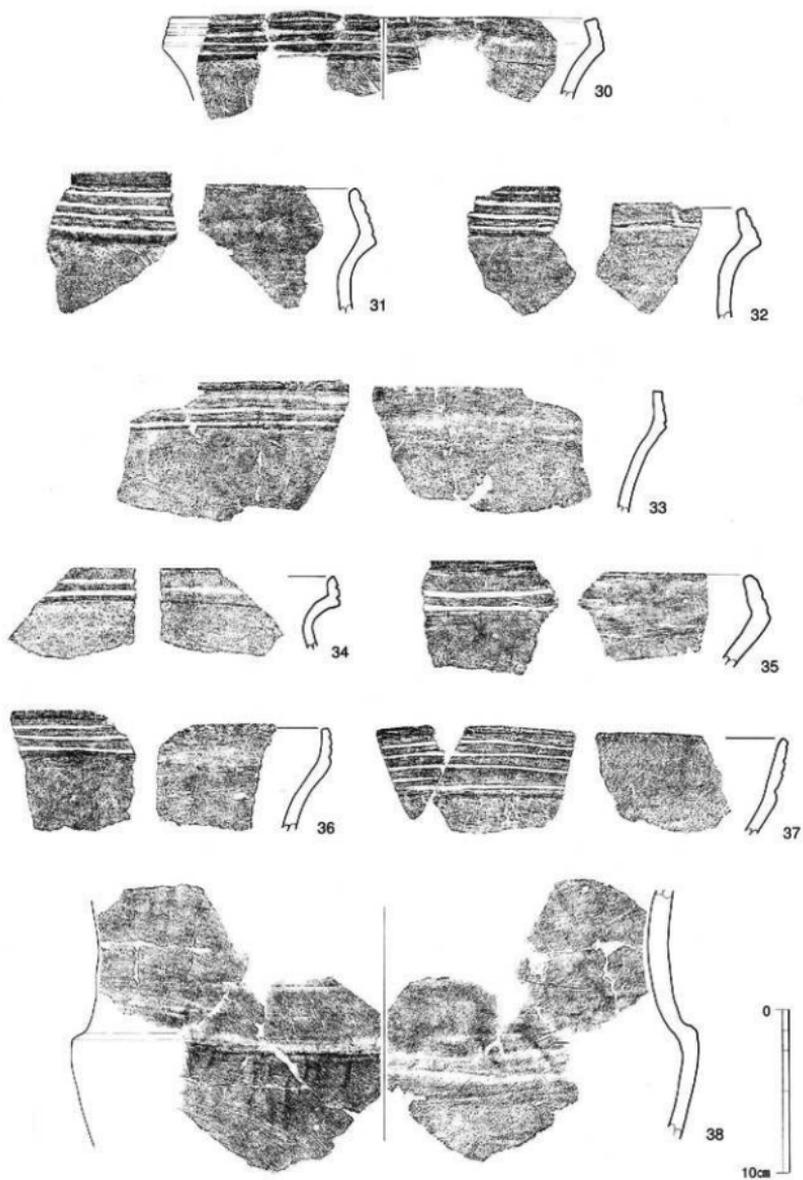
浅鉢形土器は、器面を磨き調整する精製のもの。多くは口縁端部を内側に折る形態となる。底部の多くは上げ底となる(75~78)。その他特殊例として脚台が付く資料(79)がある。



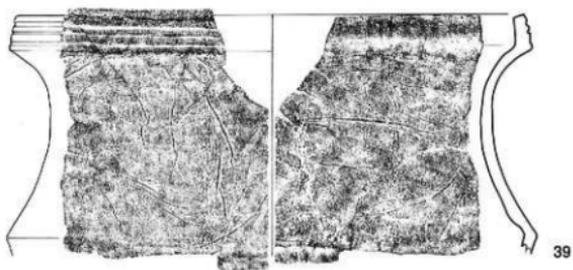
第7图 包含层出土土器(1) (1/3)



第8圖 包含層出土土器(2) (1/3)



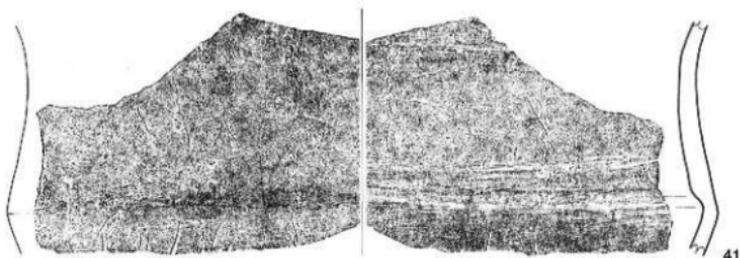
第9图 包含层出土土器(3) (1/3)



39



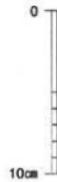
40



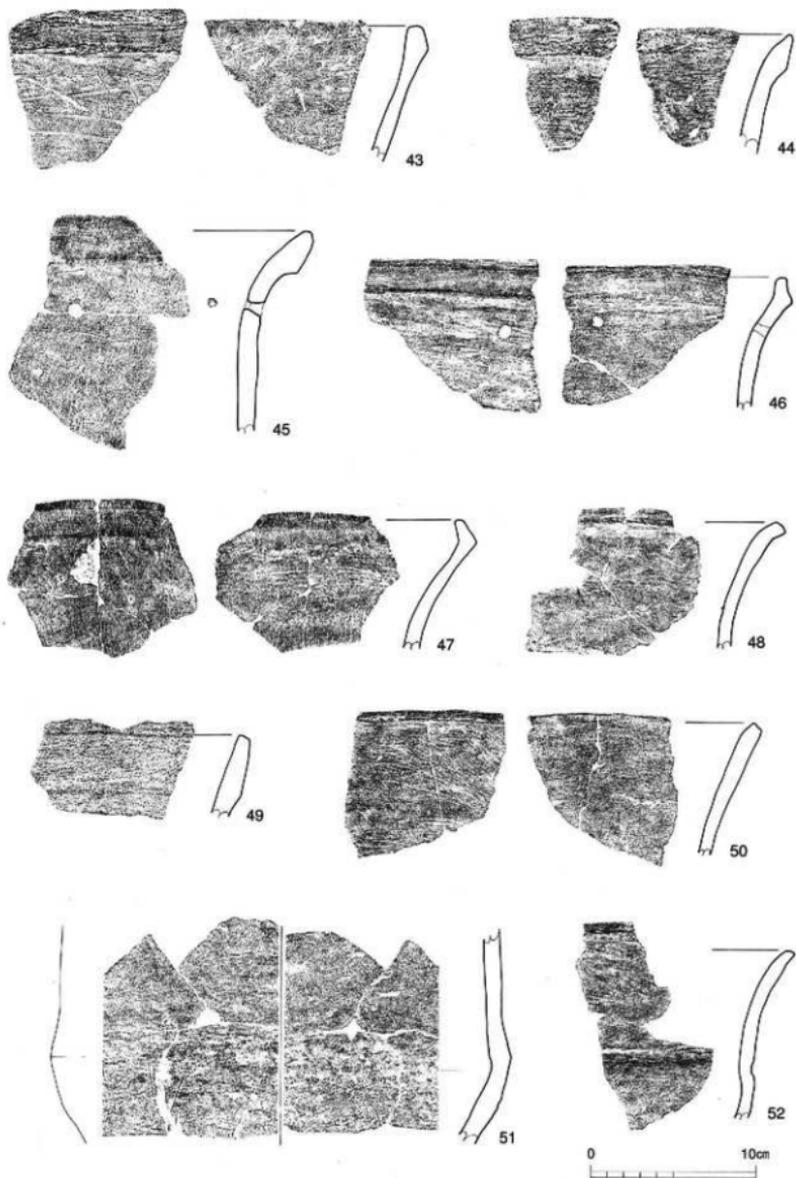
41



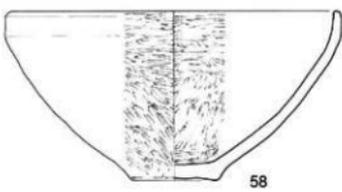
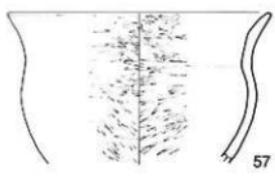
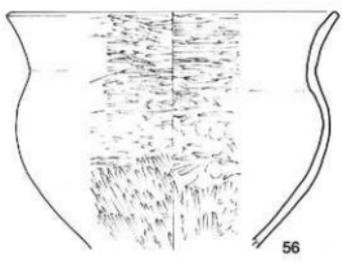
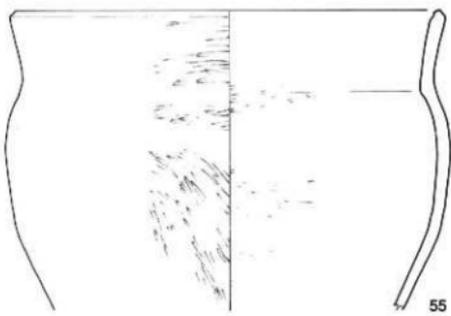
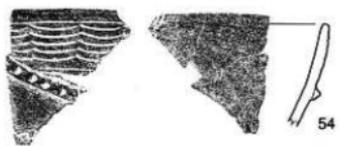
42



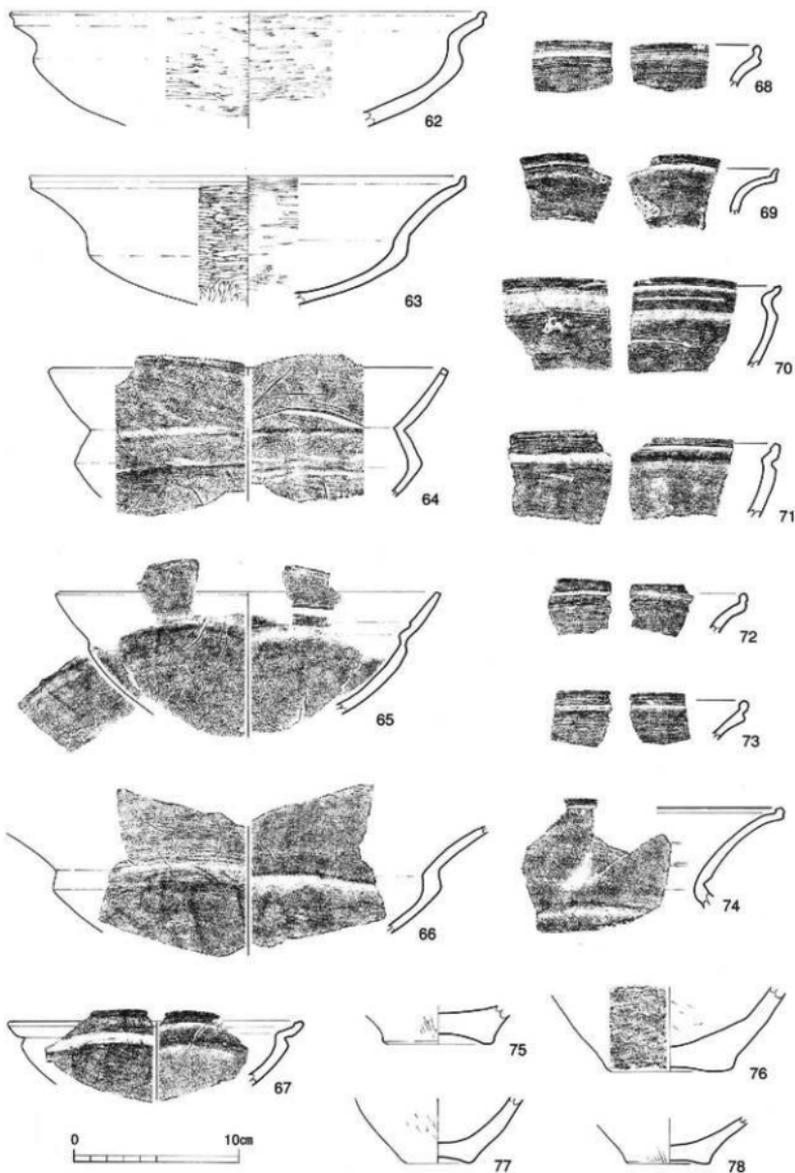
第10图 包含层出土土器(4) (1/3)



第11图 包含層出土土器(5) (1/3)



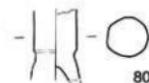
第12图 包含層出土土器(6) (1/3)



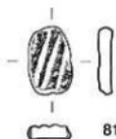
第13图 包含层出土土器(7) (1/3)



79

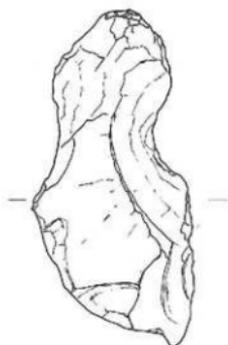


80

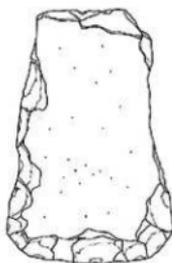


81

第14图 包含层出土石器(8)



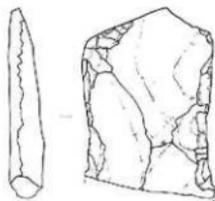
82



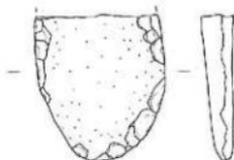
83



84



85



86



87



90



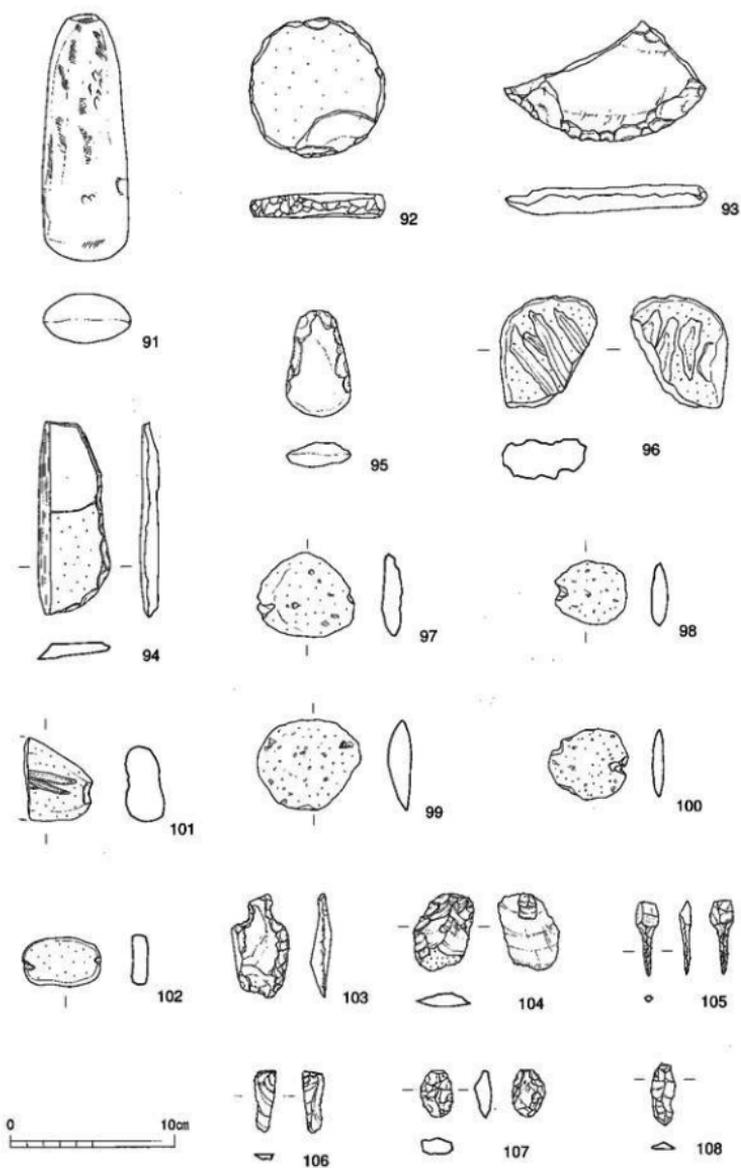
89



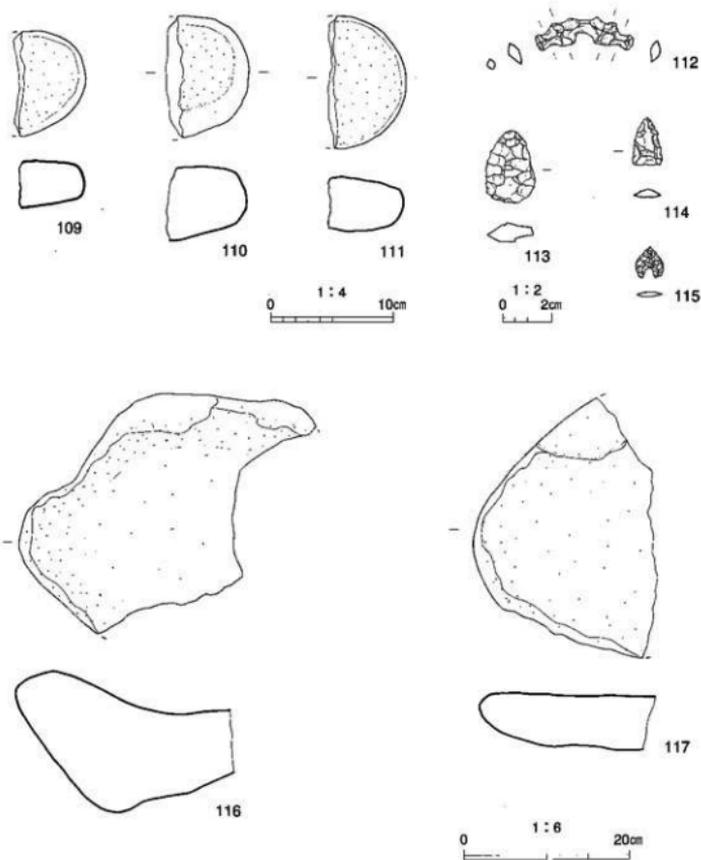
88



第15图 包含层出土石器(1) (1/3)



第16图 包含层出土石器(2) (1/3)



第17図 包含層出土石器(3)

3. 出土石器

土器とともに多量の石器が出土しているが、土器の出土状況同様、流れ込んだものと見られる。このため、おおよそ出土土器示準期に属するものであろうと考えられるものの、個々の細かな所属時期は不明と言わざるを得ない。

特徴的なものとしては、大形の打製石斧(石鐮とすべきか。82~86、擦過痕の入った凝灰岩製石製品(96)、凝灰岩製石錘(101)、軽石製の石錘(97~100)、二又状石製品(112)などが挙げられる。

第1表 土器観察表(1)

遺物 番号	出土 ・ 層	分類	器部 (腹元口径cm)	文様	調整	色調		胎土の特徴	備考
						外面	内面		
1		深	胴部		ナア	にぶい褐 明黄褐	灰黄褐 にぶい黄褐	黒・褐・淡黄色粒 黒色・透明光沢粒	黒変
2	A1 N下	-	口縁	貝殻縦刺突文	ナア 条痕	灰褐	にぶい褐	黄褐色粒 無色透明光沢粒	
3	A1 N下	-	口縁	貝殻縦刺突文	ナア 条痕	にぶい褐	褐灰	乳白・褐色粒 透明光沢粒	波状口縁
4	A1 N下	-	口縁	連点文・沈線文	ナア ミガキ	明赤褐	褐灰 明赤褐	褐・黄灰色粒	炭化物付着
5	A1 N下	-	頸部	沈線文・縄文 三日月型圧痕文	丁寧なナア	にぶい赤褐 灰褐	褐灰 明赤褐	赤褐・灰・褐色粒 黒色光沢粒	スス付着
6	A1 N下	-	頸部	連点文・沈線文	ナア	灰褐	橙 にぶい黄褐	赤褐・明褐・灰色粒 透明光沢粒	スス付着
7	A1 N下	-	頸部	墨糸文?・沈線文・連点文	ミガキ 丁寧なナア	褐灰	にぶい黄褐	灰・褐色粒	スス付着
8	A1 N下	-	胴部	縄文・沈線文	ナア	にぶい赤褐 暗赤灰	灰暗	明褐・黒色粒 透明光沢粒	スス付着
9	B2 N下	-	頸部	貝殻縦刺突文・沈線文 三日月型圧痕文	ナア ミガキ	にぶい褐	灰褐	灰白・橙・淡黄色粒	
10	A1 N下	-	口縁	連点文・沈線文	ミガキ ナア	にぶい褐 褐灰	灰黄褐	褐・褐灰色粒	スス付着
11	A1 N下	深I	口縁	沈線文	ミガキ ナア	黒褐 にぶい褐	褐	淡黄色粒 透明・黒色枝多雨粒	黒変 スス付着
12	196	#	口縁	沈線文	ナア	にぶい赤褐	にぶい赤褐	黄褐・褐色粒 黒色光沢粒	黒変
13	308	#	口縁	沈線文	ミガキ ナア	褐 明褐	黒褐 明褐	白・黒・褐色粒 黒色・透明光沢粒	黒変
14	96	#	口縁	沈線文・圧痕文	ミガキ	赤褐 にぶい橙	赤褐 にぶい褐	赤褐・黒褐・褐色粒 透明光沢粒	
15	243	#	口縁	沈線文・三日月型圧痕文	ナア	にぶい黄橙 明赤褐	にぶい赤褐	灰・褐・黒色粒	
16	286	#	口縁	沈線文	ミガキ ナア	灰黄褐	灰黄褐	褐・黄灰色粒 無色透明光沢粒	スス付着
17	223	#	口縁	沈線文・連点文・突帯	ナア	暗灰黄 にぶい褐	にぶい褐	6mm大の灰黄褐色の礫 洗灰・黒褐色粒 半透明・ 透明光沢粒	スス付着 黒変
18	1	#	口縁	沈線文・三日月型圧痕文	ミガキ	褐 黒褐	褐 黒褐	黒・灰色・褐色粒 無色透明光沢粒	黒変
19	207	#	口縁	沈線文・圧痕文	ミガキ ナア	黒褐	黒褐	褐・灰白・黒色粒 透明・黒色柱状光沢粒	

第2表 土器観察表(2)

遺物 番号	出 地 ・ 上 点 層	分 類	器 部 (腹元口径cm)	文 様	調 整	色 調		胎土の特徴	備 考
						外 面	内 面		
20	105	深I	口縁	沈線文・連点文	ミガキ・ナア	にぶい赤褐 褐灰	褐灰 にぶい褐	灰・明褐色粒 透明光沢粒	
21	130	#	口縁	沈線文	ミガキ・ナア	褐灰	灰黄褐	褐・明褐色粒 透明光沢粒	
22	327	#	口縁	沈線文・圧痕文	ナア	明赤褐	黒褐	黄灰・褐・灰褐色粒 黒色光沢粒	
23	268	#	口縁		ミガキ・ナア	黒褐	赤褐	灰褐・灰白・黄褐色粒 黒色光沢粒	
24	338 A1N下	#	口縁~胴部		ナア	橙 にぶい褐	褐灰 灰黄褐	赤褐・明褐・褐色粒 黒色光沢粒	スス付着
25	A1 N下	深II	口縁	沈線文	ミガキ	黒褐	褐 黒褐	淡黄・灰色粒 透明光沢粒	
26	B2 N下	#	口縁	沈線文	ナア	にぶい赤褐	黒褐	淡黄・黒・茶褐色粒 透明光沢粒	スス付着
27	B2 N下	#	口縁	沈線文	ナア	黒褐	にぶい赤褐	褐・淡黄・灰白色粒 透明光沢粒	スス付着
28	A3 N	#	口縁		ナア	褐	灰褐	褐・灰白・淡黄橙・ 褐灰色粒 黒色・透明光沢粒	黒変 スス付着
29	225	#	口縁	沈線文	ナア	にぶい褐	にぶい褐	乳白・褐色粒 黒色光沢粒	
30	B2 N下	#	口縁 (25.8)	沈線文	ナア	にぶい黄褐 黒	黒 灰	淡黄色粒 透明光沢粒	スス付着
31	A1 N下	#	口縁	沈線文	ナア	にぶい褐	にぶい黄褐	5mm大の褐色の礫 褐・黒・白色粒 金色光沢粒	黒変 スス付着
32	147	#	口縁	沈線文	ナア	褐 黒褐	にぶい赤褐	白・淡黄・黒色粒 透明光沢粒	スス付着
33	B2 N下	#	口縁	沈線文	ナア	黒褐	褐灰 灰黄褐	灰・赤褐・褐色粒	
34	319	#	口縁	沈線文	ミガキ・ナア	にぶい黄褐 褐灰	にぶい黄褐 褐灰	灰白・灰褐・褐色粒 金色光沢粒	スス付着
35	197	#	口縁	沈線文	ナア	橙	にぶい赤褐	黄・明赤褐・灰白色粒 透明・黒色光沢粒	スス付着 黒変
36	241	#	口縁	沈線文	ミガキ ナア	淡黄 黄灰	にぶい黄褐 褐灰	黒・白色粒 黒色柱状光沢粒	黒変
37	A1 N下	#	口縁	沈線文	ナア	黒褐	にぶい黄褐	褐・白色粒 透明光沢粒	黒変 スス付着
38	B2 N	深	胴部		ナア ミガキ	灰褐 黒褐	灰褐 黒褐	9mm大の褐色の礫 乳白・淡黄・灰白色粒 無色透明光沢粒	

第3表 土器観察表(3)

遺物番号	出土地点・層	分類	器部 (口径・高さ)	文様	調整	色調		胎土の特徴	備考
						外面	内面		
39	287 B-2N下	深I	口縁~胴部 (28.1)	枕線文	ナデ	明褐色 褐灰	にぶい黄褐色 褐灰	7.5mm大の明褐色の礫 5mm大の灰色の礫 透明光沢粒	スス付着
40	262・263 B-2N下	"	口縁~胴部 (38.0)		ナデ	暗灰黄	にぶい黄褐色	褐灰・灰白色粒 黒色・透明光沢粒	スス付着 黒変
41	257	一	胴部		ナデ	灰黄褐	にぶい褐	灰白・灰・灰黄・黒色粒	スス付着
42	360 A1N下	一	口縁~胴部		ミガキ	灰褐	にぶい赤褐 灰黄褐	6mm大のにぶい橙色の礫 淡黄・灰白・橙色粒 透明・黒色光沢粒	
43	138 139	深I	口縁		ミガキ状ナデ	にぶい褐	橙	褐灰・灰白・灰黄色粒 黒色・透明光沢粒	スス付着
44	A1 N下	"	口縁		ナデ	灰黄褐	橙 褐灰	5mm大の明褐色の礫 褐色粒	スス付着
45	A1 N下	"	口縁~胴部		ナデ	にぶい橙	にぶい橙 黒褐	灰・黒・褐色粒 黒色・透明光沢粒	穿穴 黒変
46	275	深II	口縁		ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐	白・褐灰色粒 黒色・透明光沢粒	穿穴 スス付着
47	A1 N下	"	口縁		ナデ ミガキ	黒褐	にぶい黄褐色	褐・黒・淡黄色粒 黒色柱状光沢粒	スス付着 黒変
48	A1 II+N下	深III	口縁		ミガキ	褐灰 にぶい褐	にぶい橙 褐灰	乳白・赤褐・黒・褐色粒 透明光沢粒	スス付着 黒変
49	A1 N下	深I	口縁		ナデ	浅黄	にぶい黄褐色	灰色粒 黒色・透明光沢粒	スス付着 黒変
50	A1 N下	深III	口縁		ミガキ	黒褐 灰黄褐	黒褐 灰黄褐	淡黄・褐色粒 透明光沢粒	スス付着
51	A1 N下	"	胴部		ナデ(下部ナデ)	にぶい黄褐色 褐灰	にぶい黄褐色 灰黄褐	白・灰色粒 黒色・透明光沢粒	スス付着 黒変
52	A1 N下	"	口縁	肩部に段	ミガキ	褐灰	褐	灰白・乳白色粒 無色透明光沢粒	スス付着
53	A1 N下	鉢	口縁		ミガキ	褐灰	灰黄褐	灰褐・灰白色粒	
54	A1 N下	"	口縁	弧状の縦沈線文 刻み目突帯	ミガキ	黄灰 オリーブ黒	黄灰 オリーブ黒	透明光沢粒 灰色粒	
55	380	"	口縁~胴部 (24.6)		ミガキ	にぶい赤褐	にぶい赤褐 にぶい黄褐	淡黄・黒・灰褐色粒 透明光沢粒	スス付着 黒変
56	337 342	"	口縁~胴部 (19.6)		ミガキ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	黄緑・灰白・黒・褐色粒 金色光沢粒	スス付着 黒変
57	B2 N下	"	口縁~胴部 (16.0)		ミガキ	黒褐 暗灰黄	黒褐	灰白・灰黄色粒	スス付着

第4表 土器観察表(4)

遺物 番号	出 地 ・ 土 点 層	分 類	器 部 (底元口径cm)	文 様	測 整	色 調		胎土の特徴	備 考
						外 面	内 面		
58	A1N下 B2N	鉢	口縁~底部 (20.3)		ミガキ	黒 にぶい赤褐	黒 にぶい赤褐	灰・褐・赤褐色粒	
59	A1 N下	"	口縁		ミガキ	黄灰 褐灰	黄灰 褐灰	褐・白色粒	
60	A1 N	浅	口縁		ナア、ミガキ 丁寧なナア	灰黄	にぶい黄	褐・灰・淡黄色粒 透光沢粒	
61	A1 N	"	口縁		ミガキ	にぶい黄 暗灰黄	黄灰	乳白・灰・褐色粒 透光沢粒	
62	A1 N下	"	口縁~底部付近 (28.4)	沈線文	ミガキ	にぶい黄橙 灰黄褐	黒	灰白・灰褐・黒色粒 透光沢粒	スス付着 黒変
63	A1N下 B2N下	"	口縁~底部付近 (26.4)	沈線文	ミガキ	灰黄	黄灰	灰白・淡黄色粒 黒色・透光沢粒	スス付着 黒変 赤色顔料?
64	357	"	口縁~胴部 (24.3)		ナア	黄褐	褐灰 にぶい褐	黒・明褐・灰色粒 透光沢粒	波状口縁? スス付着
65	A1 N下	"	口縁~胴部 (22.9)		ミガキ ナア	褐 黒褐	褐 黒褐	淡黄・灰色粒 透光沢粒	波状口縁? 赤色顔料
66	A1 N下	"	胴部		ミガキ	黒 褐灰	黒	淡黄色粒 透光沢粒	
67	A1 N下	"	口縁~胴部 (14.4)	(内面) 沈線状の段	ミガキ	黒褐	にぶい黄橙 褐灰	明褐灰・橙・灰白色粒 透光沢粒	スス付着
68	A1 N下	"	口縁		ミガキ ナア	浅黄橙	灰白	褐・灰色粒 透光沢粒	
69	A1 N下	"	口縁		ミガキ	にぶい橙 灰黄	灰黄	灰褐・褐色粒 透光沢粒	黒変
70	B2 N下	"	口縁		ミガキ	灰褐	灰褐	灰白・褐色粒	
71	A1 N下	"	口縁	(内面) 沈線状の段	ミガキ	褐灰	灰黄褐	乳白・灰白色粒	
72	A1 N下	"	口縁	沈線文	ミガキ	褐灰	灰黄褐	灰褐・灰白色粒 金色光沢粒	
73	A1 N下	"	口縁		ミガキ	灰褐	灰褐	灰褐・乳白・褐色粒	
74	A1 N下	"	口縁~胴部	沈線文	ミガキ	灰黄 黄灰	灰黄 黄灰	淡黄色粒 透光沢粒	
75	236	-	底部		ミガキ、ナア	にぶい褐	オリーブ褐 にぶい黄褐	灰褐・灰白・褐色粒	
76	A1 N下	-	底部		ナア	にぶい褐	にぶい黄橙	6mm大の明褐・灰白色の礫 波種・明褐・灰白色粒 黒色・透光沢粒	スス付着 黒変

第5表 土器観察表(5)

遺物 番号	出土 地・ 層	分類	器部 (原光口径cm)	文 様	調 整	色 調		胎上の特徴	備 考
						外 面	内 面		
77	B2 IV		底部		ミガキ	にぶい赤褐	暗赤褐	乳白・黄灰・褐色粒	スス付着
78	237		底部		ミガキ	灰黄褐	にぶい黄褐	6mm大の褐灰色の礫 灰褐・乳白色粒	
79	A1 IV下		脚 裾部		ナデ	明赤褐	にぶい褐	橙・灰色・淡黄色粒 透明光沢粒	
80	A1 IV下		脚?		ミガキ ナデ	にぶい赤褐 にぶい褐	褐灰	淡黄・灰色粒 黒色・透明光沢粒	
81	B1 IV		土器片継			黒褐	黒褐	淡黄・褐・灰色粒 透明光沢粒	

第6表 石器計測表(1)

遺物 番号	器 種	出 土 地 点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
82	打製石斧	336	20.40	9.75	2.05	419.0	頁 岩	
83	"	232	15.50	10.02	1.50	304.0	安山岩	
84	"	A1、IV下	(11.05)	(7.25)	(1.55)	159.7	" 岩	
85	"	195	(11.60)	(8.10)	(1.80)	242.0	" 岩	
86	"	193	(9.00)	(7.90)	(1.90)	192.0	" 岩	
87	"	B2、II	10.00	6.90	1.05	86.4	" 岩	
88	"	159	(9.60)	(8.12)	(1.45)	180.0	" 岩	
89	小型石斧	A1、IV下	(7.00)	(3.65)	(1.20)	42.4	" 岩	
90	"	A1、IV下	(5.43)	(2.77)	(1.67)	36.9	" 岩	
91	磨製石斧	335	15.00	5.25	3.00	351.0	頁 岩	
92	円形琢磨	321	8.50	8.20	1.50	167.0	安山岩	
93	削器	B2、IV	7.40	12.20	1.60	129.0	" 岩	
94	"	B1、II	11.73	4.37	1.05	74.7	" 岩	
95	小型石斧	350	6.40	3.93	1.48	38.2	" 岩	

第7表 石器計測表(2)

遺物 番号	器 種	出 土 地 点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
96	石製品	B2、II	(6.80)	(5.80)	(2.50)	82.6	安山岩	
97	石鏟	B3、IV	5.10	5.90	1.30	18.3	軽石	
98	石鏟	B2、IV下	4.00	4.30	1.00	8.3	#	
99	石鏟	A1、IV下	5.50	6.30	1.40	20.2	#	
100	石鏟	A1、IV下	4.20	4.80	0.75	7.8	#	
101	石鏟	A1、IV下	(5.10)	(4.13)	(2.42)	65.5	砂岩	
102	石鏟	A1、IV下	3.08	4.73	1.05	25.0	砂岩	
103	石匙	B2、IV下	6.30	3.50	1.05	22.0	頁岩	
104	削器	A1、IV下	4.70	3.60	0.85	14.6	黒曜石	
105	石鏟	231	4.50	1.40	0.70	2.9	頁岩	
106	使用痕跡片	A1、IV下	3.20	1.30	0.30	1.7	黒曜石	
107	剥片	A1、IV下	2.85	1.90	1.00	6.3	頁岩	
108	剥片	A1、IV下	3.80	1.40	0.45	2.4	黒曜石	
109	磨石	109	(8.55)	(5.75)	(3.85)	276.0	安山岩	
110	#	303	(9.82)	(6.73)	(6.12)	550.0	#	
111	#	A1、IV下	(10.90)	(6.30)	(4.45)	372.0	#	
112	異形石器	B2、IV	(1.35)	3.95	(0.45)	1.9	黒曜石(姫島産)	
113	尖頭状石鏟	B2、IV	2.93	2.00	0.80	4.4	チャート	
114	石鏟	B2、IV	1.95	1.20	0.35	0.7	安山岩	
115	石鏟	288	1.25	1.10	0.20	0.3	チャート	
116	石皿	A1、I	(29.20)	(35.80)	(17.41)	11,500.0	安山岩	
117	#	359	(31.85)	(22.45)	(6.80)	7,000.0	#	

第5節 まとめ

本遺跡では、縄文時代後期末から晩期にかけての多量の遺物が出土している、これまで述べてきたように、ほとんどが生産・使用の原位置をとどめるものではなく「流れ込み」、それも小河川に向かって土石流状に流れていった中の遺物群であったものと考えられる。「流れ込み」遺物の故地は、おそらく台地端部ということになるが、これもすでに触れたとおり、C地区の調査でその一端を捉えることができなかった。ただし、出土石器の中に磨石・石皿といった重量のあるものや、石鏝とすべき打製石斧など、「定住」を裏付けるものが含まれており、該期の集落の存在する状況証拠は得られたと言って良いのであろう。

そのように、台地上に集落が想定されるとすれば、斜面の中段に据えられた状態で存在した「埋甕」遺構は何を物語るのでしょうか。これについては類例から埋葬施設と考えられ、それも一般的なものではなく、小児用の土器棺と推測されよう。この種の土器埋葬の集積を行った坂本嘉弘氏によれば、九州では縄文時代後期後半～木頃は南九州まで分布域を広げるといふことであり¹⁾、その流れの中で出現したものと位置づけられる。

なお、土器内の埋土の成分分析を行ったが、骨片等はなく、リン分もごくわずかであるなど、遺骸埋葬の確認は得られなかった。

(文献)

- 1 坂本嘉弘 「埋甕から甕棺へ ー九州縄文埋甕考ー」『古文化談叢』32 1994



虎崩・榎木田遺跡全景



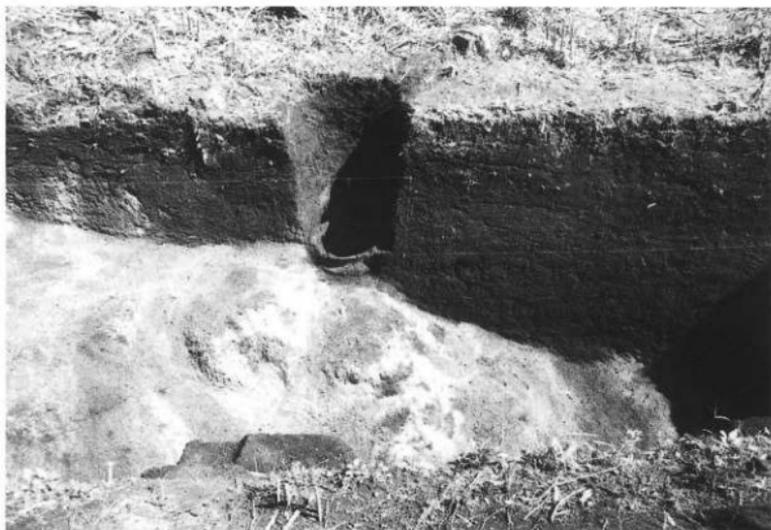
上空より



C地区調査状況



C地区層序



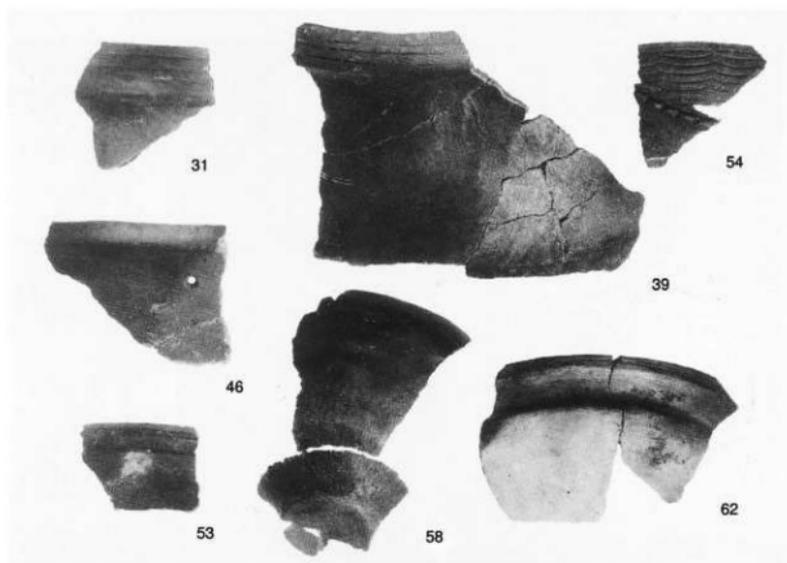
「埋藏」と層序



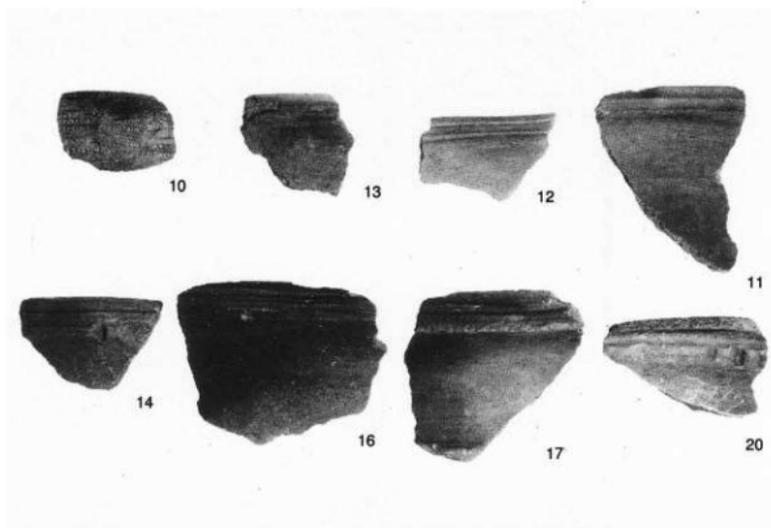
「埋藏」近景



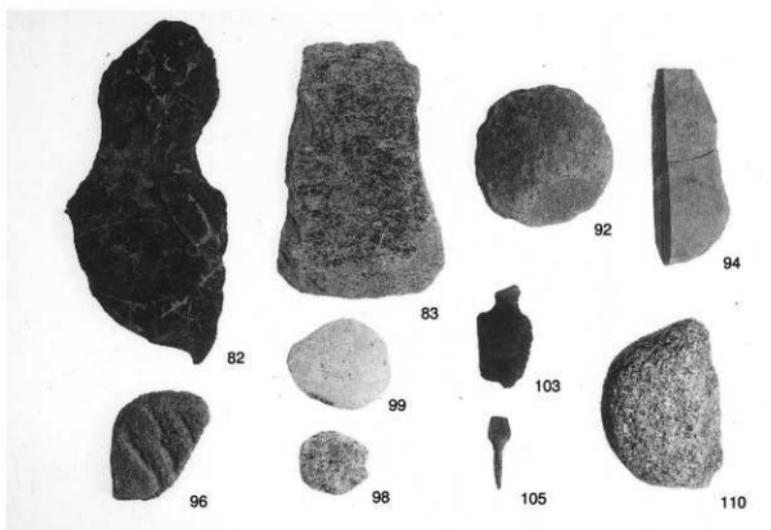
出土土器 (1)



出土土器 (2)



出土土器 (3)



出土石器

第三章 黒勢戸遺跡・上野原遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

高崎町は宮崎県の南西部に位置し、霧島連山南部の高千穂峰の山麓から、南東方向に連なる長尾山地の東側に広がる台地にある。北から北西部を高原町、北東部を野尻町、東部を高城町、南から南東部を都城市、西部から南西部を山田町と、町境の全てが隣接しており、古くから北諸県と西諸県を結ぶ交通の要所となっている。標高約300mの山地や台地が町の面積の半数以上を占め、水田として利用されている平地は標高約120～160mに広がる。地質は、四万十層群を基盤とし、その上には入戸火砕流堆積物(シラス)、アカホヤ、御池ボラ等の火山噴出物が厚く堆積している。

黒勢戸遺跡(第1図1)は、北諸県郡高崎町大字大牟田字黒勢戸に所在する。高崎町の中心街から西へ約1.5kmにあり、東流する大淀川水系高崎川の支流である荒場川の右岸、標高約166～173mのシラス台地上に立地している。上野原遺跡(第1図2)は同町大字大牟田字上野原に所在する。黒勢戸遺跡から谷を挟んで南東に約700m、標高約166mの台地上に位置している。

高崎町における歴史の展開は、河川沿いの山地沿辺部に広がる台地上に多く見られる。各時代の概要について述べたい。

高崎町では、旧石器時代の遺跡は確認されていない。霧島山麓地方では火山噴出物の堆積が厚いため、この時期の遺跡は発見されにくいと思われる。

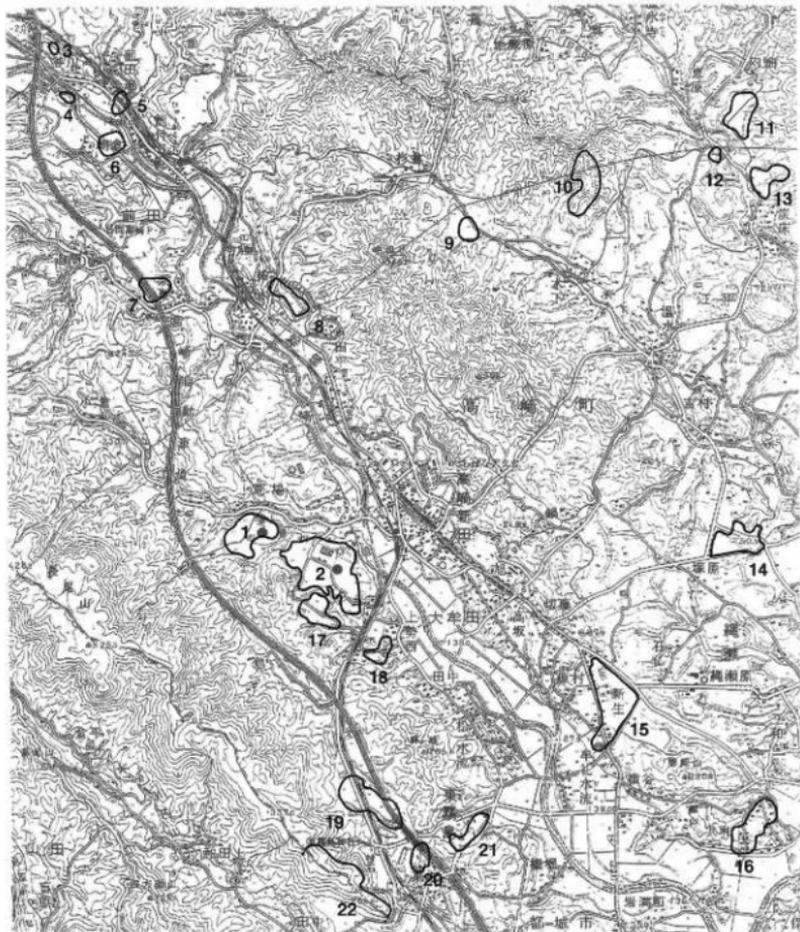
縄文時代では、中期以外の遺跡については確認されている。中期の遺跡は、県内においては稀薄であるため、今後発見される可能性は少ないと思われる。早期の遺跡は楕円型土器が出土した砂子田遺跡(第1図12)がある。前期では、菅畑土器や貝殻文系の縄形式土器の出土が大川毛遺跡でみられる。後期になると遺跡が増大する。後期前半の沈線文(指宿式)土器を出土した権現ヶ字都遺跡(第1図9)・柘木(柘木)遺跡(第1図8)・下原遺跡(第1図19)、後期後半の黒色磨研土器を出土した宇都口遺跡(第1図11)、後期後半～晩期前半の西平式土器や黒色磨研土器を出土した北迫遺跡(第1図17)、後期の土器を多量に出土した鳥越前遺跡(第1図5)や海蔵寺遺跡(第1図6)がある。晩期前半の遺跡としては栗葉上原遺跡(第1図7)がある。特に、海蔵寺遺跡では円形および楕円形の住居跡が4軒、柘木(柘木)遺跡では方形の住居跡が1基、北迫遺跡では住居跡の一部が検出されている。

弥生時代の遺跡は、発掘調査によって明らかになったものは少ない。今村遺跡(第1図20)では中期前半～中葉の亀の甲式土器を出土している。朴木遺跡(第1図13)は県内では初見になる中期に比定される石蓋土壇墓が11基検出され、その内1基には無蓋磨製石蔵24本と多くが出土している。椋屋敷第2遺跡(第1図3)では、方形プランの竪穴住居跡の一部が検出されている。垂弧文土器と高坏等が出土し、後期末葉に比定される。昭和40年に縄瀬字塚原で、畑削平中に両端入り方形包丁が出土している。

古墳時代の遺跡は、昭和50年に企業誘致の為に敷地造成工事に伴う発掘調査が行われた上野原遺跡がある。この遺跡は、今回調査を行った箇所西側にある工場敷地付近に位置すると思われる。古墳時代初期の集落遺跡で、方形の竪穴住居4軒と円形プランを基調とする日向型間仕切り住居1軒が調査されている。県南の山間部において前方後円墳を有する古墳群の一つである塚原古墳群(第1図14)が縄瀬台地群の標高154mにある。5世紀後半～6世紀に比定される古墳群で、前方後円墳1基・円墳19基・方墳1基・地下式横穴墓6基で構成されている。その他、横谷原村古墳群(第1図15)や横尾(第1図

16)、鶴ノ原、仮屋尾地下式横穴墓群が分布している。

歴史時代の遺跡としては、平安時代前半(10世紀前半)の越州窯青磁碗を出土した政所第2遺跡(第1図21)、平安時代~中世の掘立柱建物跡3棟を検出した下原遺跡(第1図19)がある。また、中世の山城や砦の存在は数多く知られており、龍虎山城(高崎城)(第1図4)・木場砦・陣ノ端砦(第1図22)・浮城(第1図18)・城の岡(第1図10)・柳ノ城・すかしの城等がある。



第1図 黒勢戸・上示野原遺跡位置図(1/50,000)

第2節 調査の経過と概要

荒場川との比高差約20mの標高約166～173mのシラス台地には、緩やかな起伏をもつ畑地が開けており、そこに黒勢戸遺跡と上示野原遺跡は位置している。今回の調査区域は農業水利事業用のパイプライン埋設箇所で、3～4m幅で数メートルにもわたるものであった。両遺跡は弥生～古墳時代の周知の遺跡であり、黒勢戸遺跡の試掘調査では縄文後期頃の土器片や土坑状遺構が確認された。このことからパイプライン埋設箇所に集落などの存在が推測されたため本調査を行った。

黒勢戸遺跡は、台地中央付近から南東側の谷にかけて西から東に175m、南東方向に屈曲して175mの約1,040㎡の調査区である。調査地は畑地の境および未舗装（一部舗装）の農業用道路であったため、耕作による攪乱は受けておらず、土層の残存は良好であった。現地形は西から東に緩やかに高くなり次第に谷へと落ちていくが、旧地形は西から東にかけて高くなり、途中屈曲部付近に緩やかな谷があったことがわかる。（第3図）

上示野原遺跡は、東西に約90m、面積約200㎡の調査区で台地中央部に位置する。調査地は舗装道路として使用されていたが、以前には場整備が実施されているため攪乱され、黒勢戸遺跡ほど堆積層は良好に残っていない。また、高崎町教育委員会以前に隣接する農道北を試掘調査しているが、この部分では遺構などは検出されていない。

両遺跡では、縄文晩期の鉢や弥生～古墳時代の甕、壺、高平等の土器片がわずかに出土している。遺構は、上示野原遺跡で弥生後期末～古墳初頭の遺物が集中する竅穴住居跡と思われる落ち込みが1基確認されている。また、両遺跡でピット状遺構を検出しているが、調査区幅が狭小であるため、確実に建物と認定できるものはなかった。

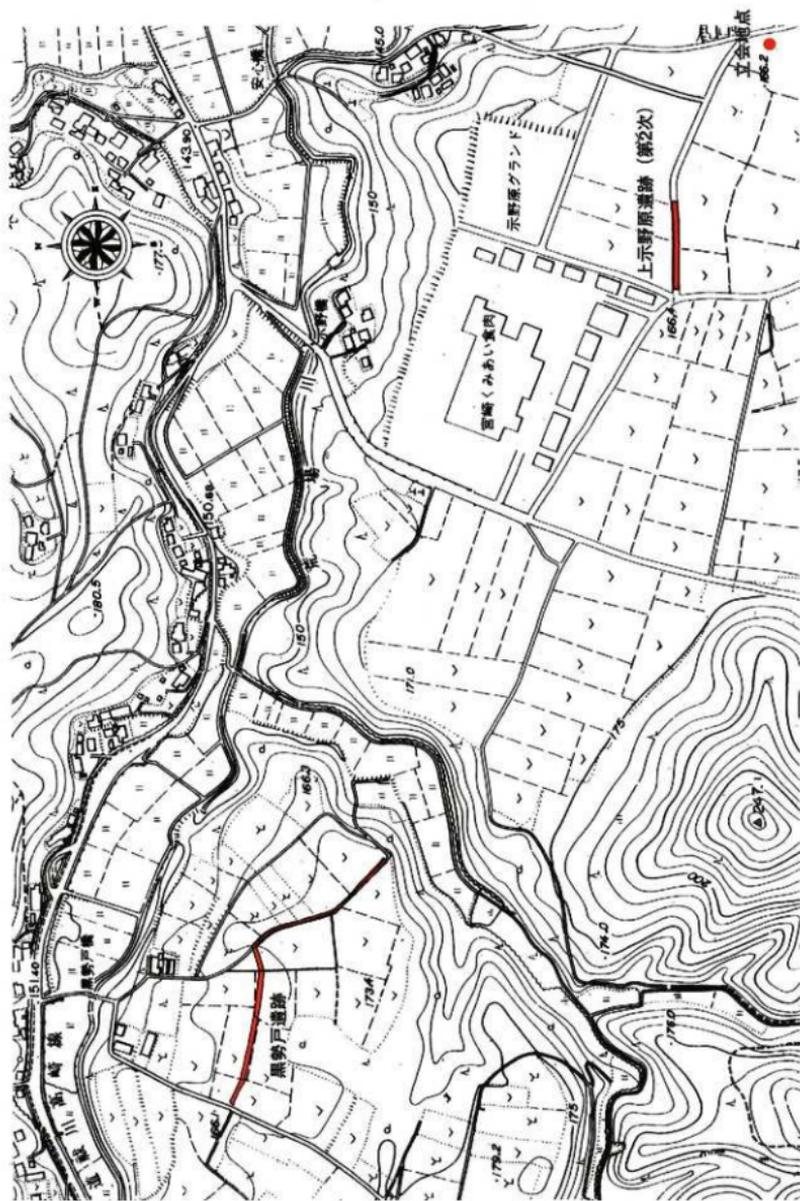
以下、調査日誌を抜粋して発掘調査の経過を記述する。

黒勢戸遺跡

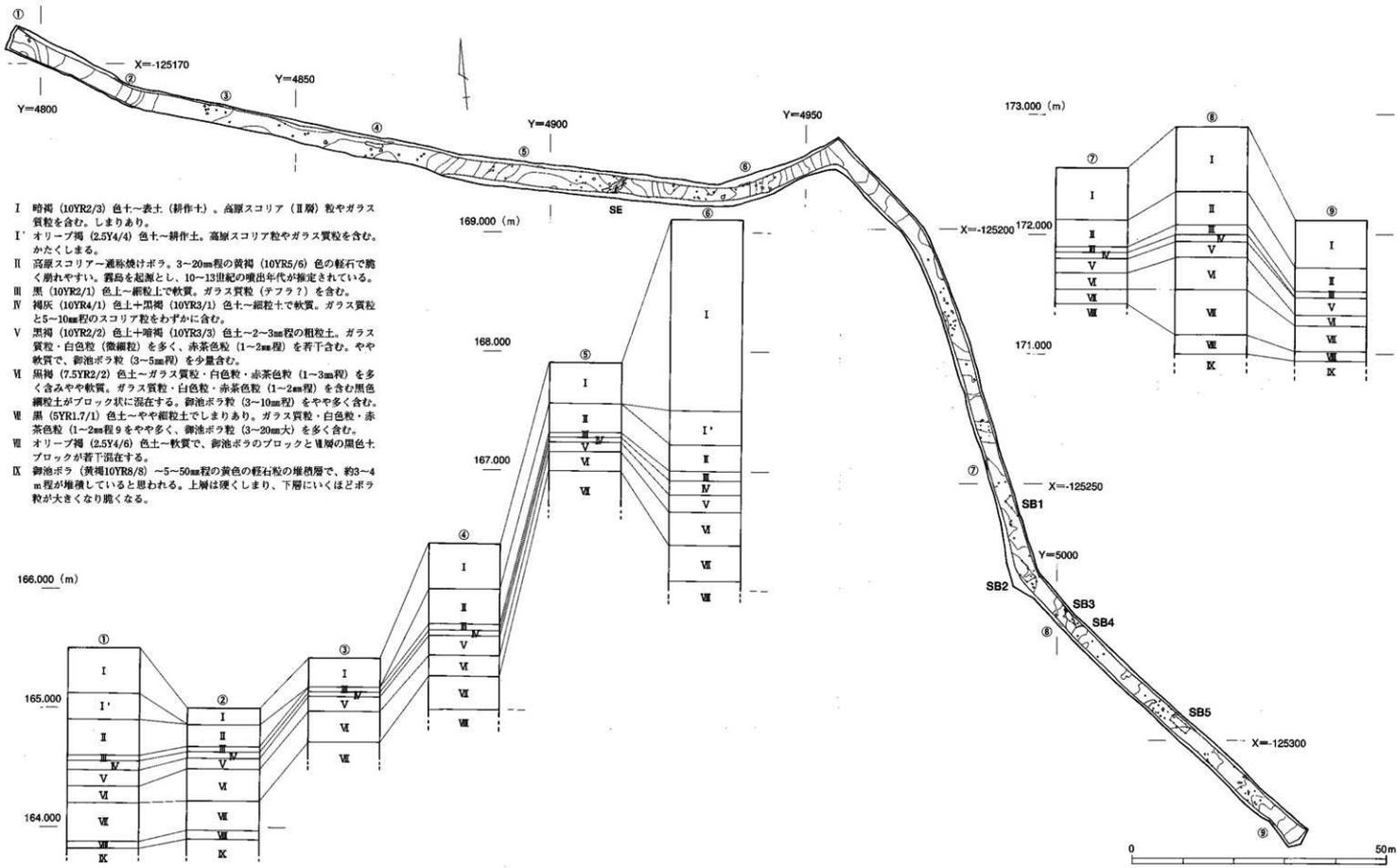
- 平成7年11月22日 重機による掘り下げを開始。遺物包含層のⅥ・Ⅶ層上面まで剥ぐ。
- 11月24日 遺物包含層のⅥ・Ⅶ層を人力で掘り下げる。貼付刻目突帯を持つ土師器甕の小片が1点出土する。ほとんど遺物は包含されていない。
- 11月27日 遺物の取り上げ。Ⅷ層の御池ボラ上面を精査し、遺構検出を行う。
- 11月28日 ピット状遺構や不定形の黒色土のにじみを検出し、掘り上げる。ほとんどが木根である。
- 11月29日 遺構実測等記録開始。
- 12月5日 ピット状遺構の並びを検討。溝状遺構の検出。土層断面の記録。
- 12月7日 Ⅷ層直上に縄文晩期土器の鉢底部出土。
- 12月13日 地形測量の実施。
- 12月22日 調査終了。
- 12月25日 当遺跡と上示野原遺跡間のパイプライン埋設箇所の立会い調査を行う。

上示野原遺跡

- 平成7年12月26日 重機によりⅧ層の御池ボラ層付近まで剥ぐ。人力による掘り下げと精査。



第2図 黒勢戸・上野原遺跡周辺地形図 (1/5,000)



第3図 黒崎戸遺跡 遺構分布図 (1/700) 及び土層柱状図 (1/30)

- 12月27日 竪穴住居跡と思われる落ち込みを確認。掘り上げ、土器の集中みられる。
包含層出土遺物の取り上げ。
- 平成8年1月8日 Ⅷ層の御池ボラ上面検出のピット状遺構群の掘り上げ。
- 1月10日 本事業に伴う取付け道路部分の立会い調査を行う。
- 1月11日 遺構実測の実施。
- 1月16日 調査終了。

第3節 層序

黒勢戸遺跡と上示野原遺跡の基本層序を第3図と第7図に示している。

I層とI'層は表土及び耕作土で、II層の高原スコリアが混在するしまりのある層である。II層の高原スコリア層は、3～20mm大の黄褐色の軽石粒の堆積層で、通称焼けボラともいう。約20～30cm程堆積し、軽石粒の大きさによって3層に分けられる。霧島を起源としたボラで、10～13世紀の噴出年代が推定されている。III層は黒色細粒土の軟質層である。わずかにガラス質粒(火山灰?)を含む。IV層は褐灰色土と黒褐色土の混じった軟質細粒土層である。ガラス質粒と5～10mm程のスコリア粒をわずかに含む。V層は黒褐色土と暗褐色土の混じったやや軟質の粗粒土層である。ガラス質粒、白色粒、赤茶色粒、3～5mm程の御池ボラ粒を若干含む。VI層とVII層は遺物包含層である。遺物包含密度は非常に低いが、弥生時代～古墳時代の土器片が出土している。VI層は3～10mm程の御池ボラ粒をやや多く含んだ、やや軟質の黒褐色土層である。V層に類似する黒色土がブロック状に混在し、層全体にガラス質粒、白色粒、赤茶色粒を含む。VII層は3～20mm程の御池ボラ粒を多く含んだしまりのある黒色細粒土である。ガラス質粒、白色粒、赤茶色粒を若干含む。VIII層は軟質のオリブ褐色土に御池ボラのブロックとVII層の黒色土ブロックが混在する層である。この層の上面で縄文時代晩期の土器が出土している。IX層の御池ボラ層は、5～50mm大の黄色の軽石粒の堆積層で、約3,000年前に霧島より噴出されたものである。この地域での堆積は3～4mと非常に厚く、この下に縄文時代の遺物包含層が存在する可能性もあるが、調査区の幅が約2mと狭小であるため調査は不可能であった。IX層の下には茶色ボラ粒を含む、黒色粘質土が見られる。

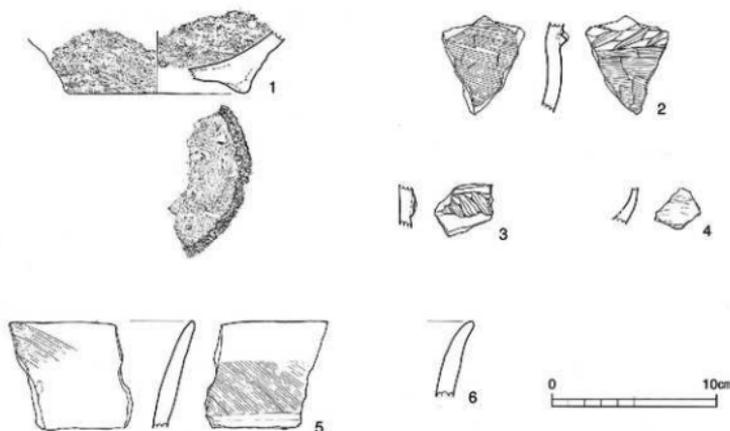
黒勢戸遺跡は、西から東に向かって標高が高くなり、その中でも土層断面⑦・⑧(第3図)付近が一番高い。II層の高原スコリアは調査区全体に存在し、下位の層も安定していたが、土層断面⑦付近では遺物包含層のVI・VII層の堆積が薄く、やや不安定であった。

上示野原遺跡では、基本層序II層の高原スコリア層はほ場整備により攪拌され耕作土中に含まれていた。また、III・IV層も無く、V層から下の層が確認できた。上質が黒勢戸遺跡より若干砂質性が強くなる。

第4節 遺構と遺物

1. 黒勢戸遺跡

黒勢戸遺跡では、縄文時代や古墳時代の土器片の出土が数点みられただけで、これらの時期に伴う遺構は検出されていない。ピット状遺構が調査区のほぼ全域に検出されているが、建物として確実に認定できるものはない。



第4図 黒勢戸遺跡 出土土器実測図 (1/3)

(1) 縄文時代の遺物

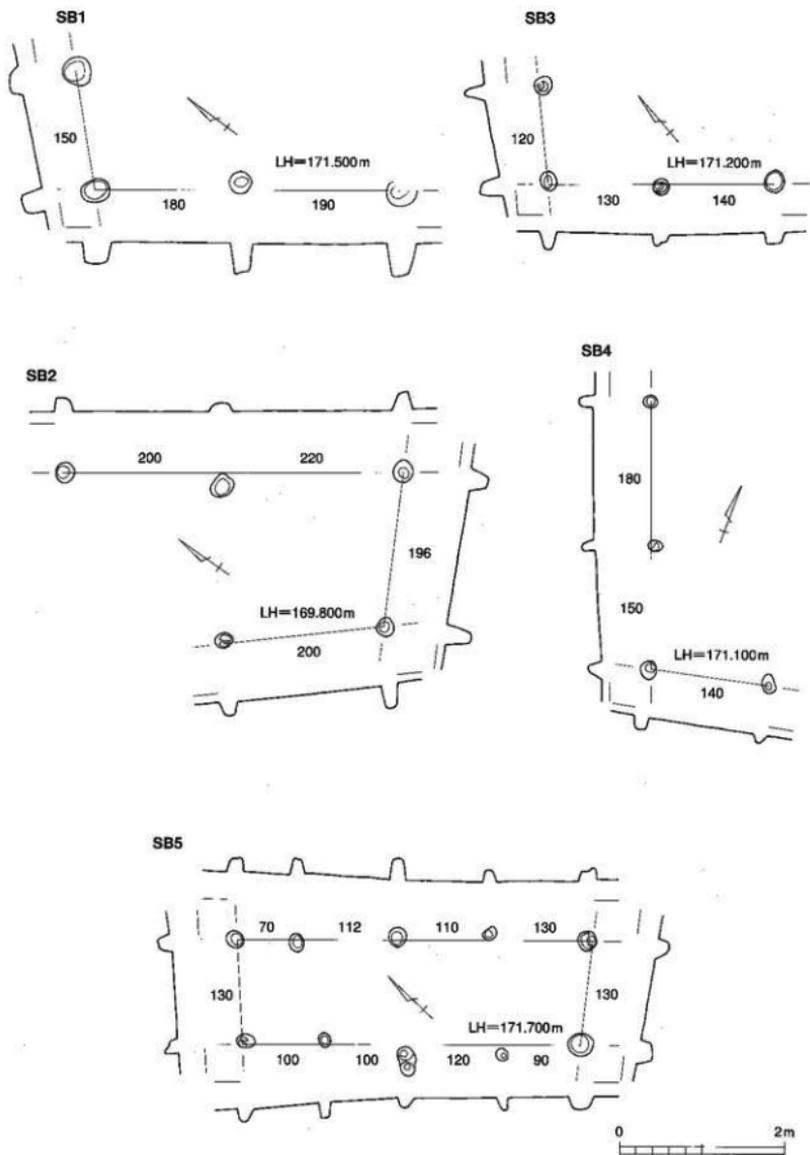
遺物は第4図の1の1点のみで、晩期の鉢形土器の底部である。土層断面⑨付近の調査区壁面のⅧ層直上面で出土した。底部から胴部が大きく開くものと思われ、底には高台状に粘土が貼り付けられ、上げ底を呈する。外面は風化が著しいが、内外面ともナデで、内面には炭化物の付着がみられる。

(2) 古墳時代の遺物

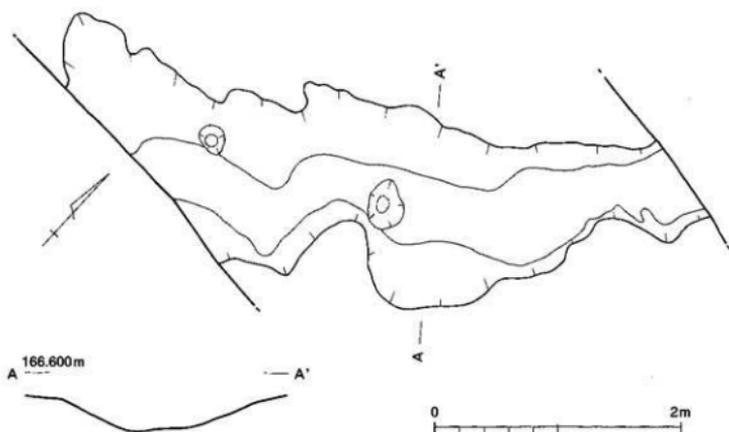
遺物は土器器片が数点出土しており、第4図に示している。遺物の出土層はⅧ層(5・6)とⅨ層(2～4)である。2は頸部くびれ部に貼付刻目突帯を持つ甕である。刻目は、ヘラ状の工具により、右上がりの斜方向に刻まれている。内外面とも横・斜方向のハケ目調整がみられる。3は貼付刻目突帯を持つ甕であるが、小片であるため器形は不明である。刻目は左上がりの斜方向で、突帯下部の貼り付け状況から、厚みのあるヘラ状の工具で若干押圧した様子が窺われる。内外面ともナデ仕上げである。4は坏の体部から底部付近と思われる。外面は単位は不明瞭であるが、横方向のミガキ、内面はナデ仕上げである。5と6は鉢形を呈するものの口縁部と思われる。5はわずかにくびれが存在する。口縁部は若干外側にまっすぐ延び、外面は口縁上部は丁寧なヨコナデで下部は斜方向のハケ目、内面は斜方向のハケ目の上をナデている。6は口縁端部がわずかに外反する。内外面ともナデ仕上げである。

(3) 時期不明の遺構

遺構はⅨ層の御池ボラ層上面で検出し、自然流路と思われる溝状遺構1条と調査区の全域にビット状遺構がある。



第5図 黒勢戸遺跡 1号~5号据立柱建物跡 (1/60)



第6図 黒勢戸遺跡 溝状遺構 (1/40)

ピット状遺構の埋土はⅥ層やⅦ層で、径が20～30cm、深さが10～40cmを測る。幾つか柱の並びを検討したが、調査区が狭いため建物として確実なものは確認できなかった。ここでは検討したもののうち5棟について掘立柱建物跡として図示した。

それぞれ出土遺物がないため、時期は不明である。

a. 掘立柱建物跡：SB (第5図)

遺構は、調査区内で小高くなった東側に検出されている。

1号掘立柱建物跡 (SB1)

長軸をN-38°-Wにとる1間×2間を検出しているが、さらに南東方向に広がる可能性がある。柱間は北東-南西が150cm、cmである。柱穴径は25～30cm、深さは15～40cmである。

2号掘立柱建物跡 (SB2)

長軸をN-36°-Wにとる1間×2間を検出している。柱間は北東-南西が196cm、北西-南東が200・220cmである。柱穴径は20～30cm、深さは10～30cmを測る。

3号掘立柱建物跡 (SB3)

長軸をN-52°-Wにとる1間×2間を検出しているが、北東方向に柱穴が検出される可能性を持つ。柱間は北東-南西が120cm、北西-南東が130・140cmである。柱穴径20～30cm、深さ10～25cmである。

4号掘建柱建物跡 (SB4)

長軸をN-17°-Wにとる1間×2間を検出し、SB3と切り合い関係を持つ。柱穴は北東方向に検出される可能性がある。柱間は東-西が140cm、北-南が180・150cmで、柱穴径は20cm前後、深さは10~20cmを測る。

5号掘建柱建物跡 (SB5)

主軸をN-45°-Wにとる1間×4間を検出している。梁130cm、桁行410~430cmである。柱穴径は15~30cm、深さは15~30cmを測る。

b. 溝状遺構：SE (第6図)

調査区が東西方向から南に屈曲する地点から西に約40mの所に位置する。南西から北東方向に走行し、その両端は調査区外へ伸びるものと思われる。遺構埋土はⅡ層土である。検出面における溝幅は70~150cm、深さは20cmで、断面形は皿状を呈する。溝状遺構は地形に沿って蛇行して走行し、遺構の明確な立ち上がりも確認できないため、自然流路の可能性が考えられる。

2. 上示野原遺跡

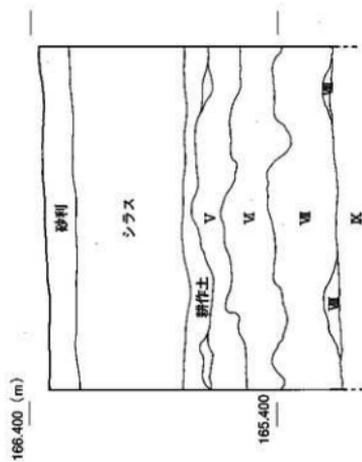
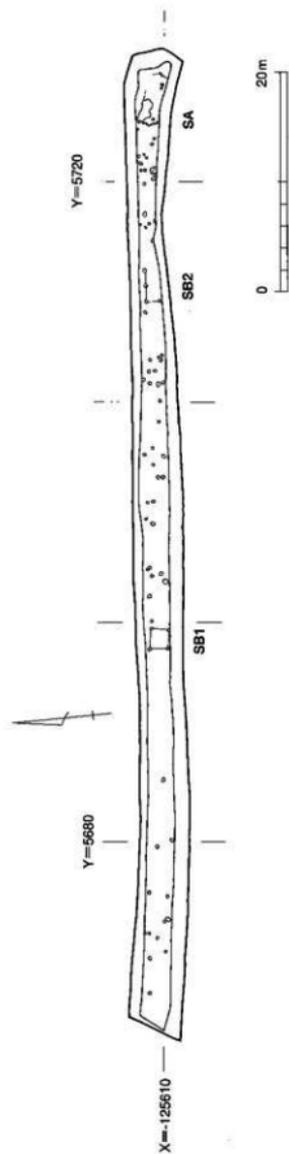
上示野原遺跡では、弥生終末期から古墳時代初頭に比定される土器が出土し、これに伴う遺構として竪穴住居跡の可能性を持つものを1軒確認している。その他、ピット状遺構を検出しているが、黒勢戸遺跡と同様、調査区幅が非常に狭小であることから、確実に建物と認定できるものはない。

(1) 弥生~古墳時代の遺構と遺物

a. 竪穴住居跡：SA (第8図)

遺構は、調査区の東端に位置する。Ⅶ・Ⅷ層を掘り下げ、Ⅸ層の御池ボラ上面で精査を行ったところ、南側の調査区壁面に接して長方形のにじみが検出された。土層確認のために深掘りしたトレンチによって北東側のコーナーはなくなっていたが、にじみ部分の掘り上げを行うと土器が集中して出土した。竪穴住居跡の半分としての可能性をもち、南側の調査区壁面で上層観察を行ったところ、Ⅷ層面からの掘り込みが確認できた。また、掘り込み上の堆積層は土圧によるものか、わずかに窪んでいることが窺われる。主軸をN-18°-Eとし、東西幅は約4.5~4.9mを測る。掘り込みは20~40cmと比較的浅いもので、Ⅸ層の御池ボラ面をわずかに抜いている。平面プランは若干南側がすばまりつつあり、いびつになることも考えられる。北東側コーナーには土坑状の落ち込みがある。主柱穴は図示する2本を考えており、柱の位置から4本柱が想定される。しかし、柱穴が浅いことに不安が残る。

出土遺物は第9図の7~18である。7~13は甕である。7は口径が約15.8cmで、胴部上位にやや膨らみを持った小振りの長胴形甕になると思われる。外傾する口唇部は平坦に形成され、外面の屈曲部下の粘土の継目上には、縦方向のハケ目による稜のケズリ出しが見られ、その上にはナデによる指痕が残る。内面の屈曲部から上にも指ナデの痕が残り、一部ミガキ状の丁寧なナデが見られる。内外面ともナデ仕上げで、外面にはススが多く付着する。8は口縁部はやや内湾気味で、やや外傾する口唇部は平坦に仕上げられている。調整は外面は縦方向のハケ目、内面はナデである。9は胴部が張らないものになると思われる。口唇部はやや丸い。内外面とも工具によるナデとナデで、口唇部付近の内外面には粘上



砂利層 舗装道路新客土

シラス

新作土

V 黒層 (10YR2/2) 色土+暗褐色 (10YR3/3) 色土+砂質粗粒土でやや軟質。ガラス質粒・白色粒 (微細粒)・赤茶色粒 (1~2mm程) をやや多く、御池ボラ粒 (3~5mm程) を少量含む。

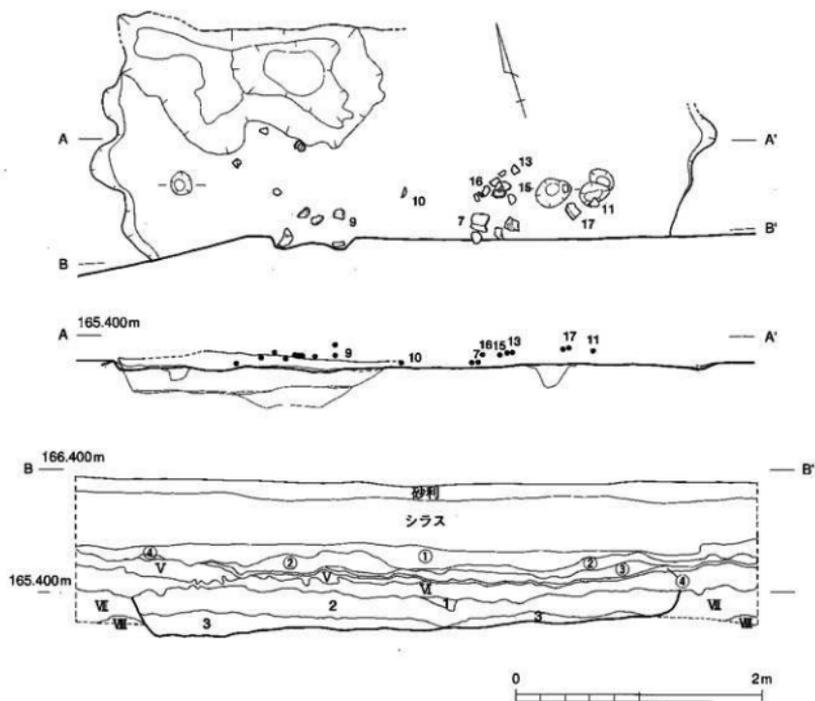
VI 黒層 (7.5YR2/2) 色土+ガラス質粒・白色粒・赤茶色粒 (1~3mm程) を多く含む砂質粗粒土。やや軟質。ガラス質粒・白色粒・赤茶色粒 (1~2mm程) を含む黒色層粒土がブロック状に混在する。御池ボラ粒 (3~10mm程) をやや多く含む。

VII 黒 (5YR1/7) 色土+砂質中粒土で、ややしまりあり。ガラス質粒・白色粒・赤茶色粒 (1~2mm) をやや多く、御池ボラ粒 (3~20mm大) を多く含む。

VIII ノリープ層 (2.5Y4/6) 色土+軟質で、御池ボラのブロックと同層の黒色土ブロックが若干混在する。

IX 御池ボラ (黄褐色10YR8/8) しまりあり。

第7図 上示野原遺跡 遺構分布図 (1/450) 及び基本土層図 (1/20)



基本層序 V 黒褐 (10YR2/2) 色土+暗褐 (10YR3/3) 色土

VI 黒褐 (7.5YR2/2) 色土

VII 黒 (5YR1.7/1) 色土

Ⅷ オリーブ褐 (2.5Y4/6) 色土

① 黒 (2.5Y2/1) 色土→非常に硬質。高原スコリアや御池ボラを若干含む。

② 黒 (10Y2/1) 色粘質土→軟質。高原スコリアや御池ボラ粒 (5-10mm程) を少量含む。

③ 黒 (10Y2/1) 色粘質土→やや軟質。高原スコリアや御池ボラ粒 (5-10mm程) を少量含む。

④ 褐 (7.5YR4/6) 色粘質土→明褐 (7.5YR/8) 色粒 (5mm程) を少量含む。

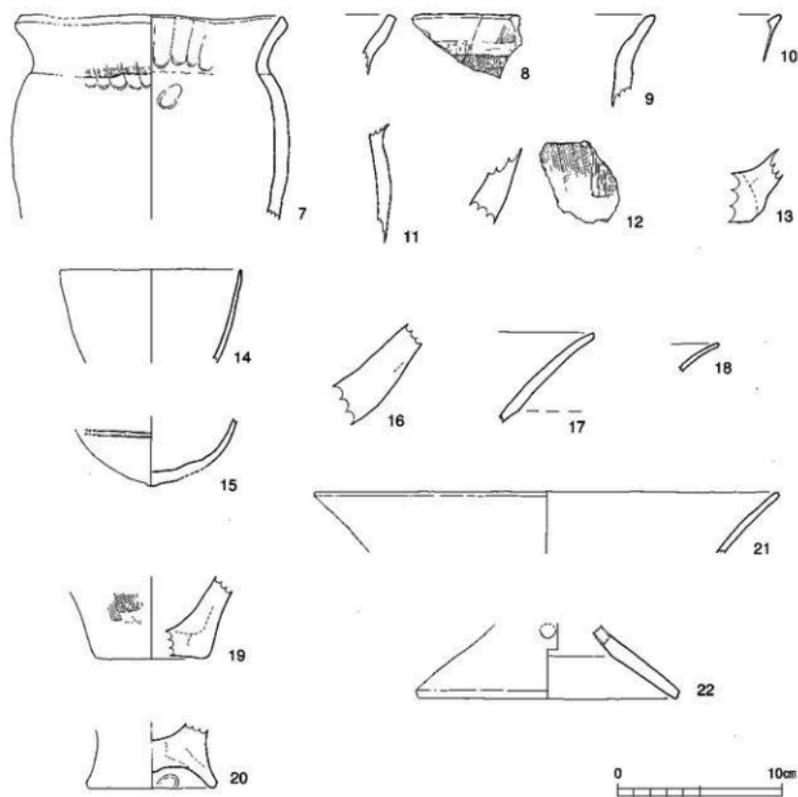
1 黒褐 (7.5YR3/1) 色土→やや軟質で若干粘性あり。きめ細かく、御池ボラ粒 (5-10mm) を若干含む。

2 黒褐 (7.5YR3/1) 色土→しまりあり。きめ細かく若干粘性あり。御池ボラ粒 (3-10mm) を若干含む。

3 黒 (7.5YR1.7/1) 色土→やや軟質で若干粘性あり。御池ボラ粒 (5-15mm) をやや多く含む。

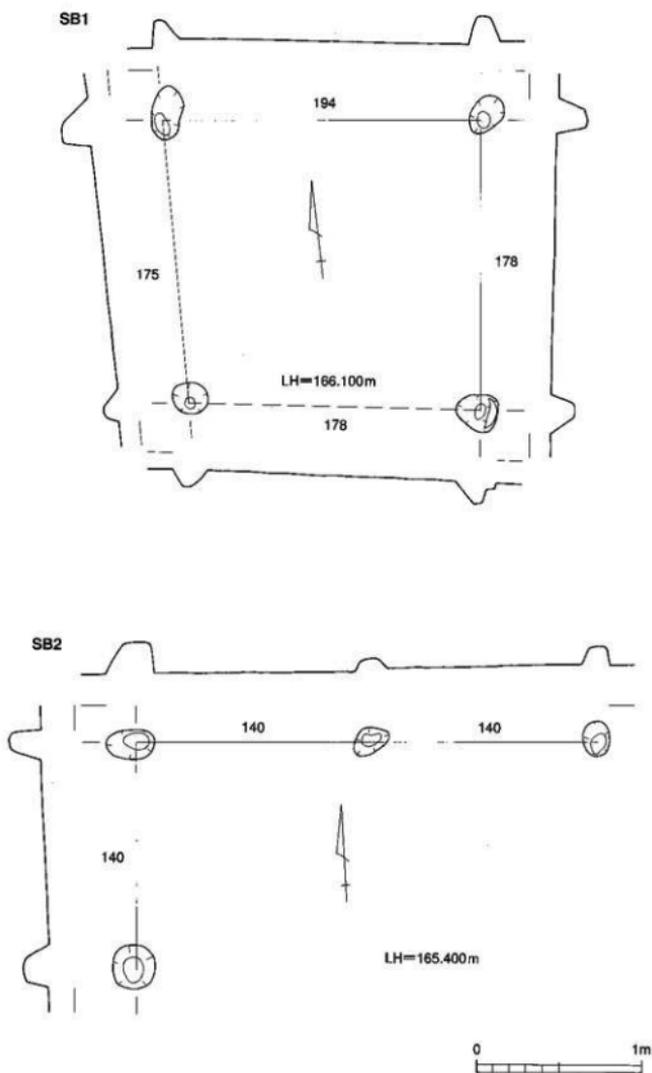
耕作土

第8図 上野原遺跡 竪穴住居跡 (1/40)



第9図 上示野原遺跡 竪穴住居跡及び包含層出土土器実測図 (1/3)

の塊が残り、粗い作りが窺われる。10は口縁部で、口唇部は丸く仕上げている。内外面ともナデである。11は頸部から胴部上位で、外面の屈曲部下にはヨコナデによる若下の段を持つ。内外面ともナデで、外面の残存胴部下半にはススが付着している。12は底部付近で、外面に縦方向のハケ目が見られる。内面はナデである。13は底部である。平底で厚みを持つ。内外面ともナデ仕上げで、外面にはススが付着している。14～16は壺である。14と15は同一個体で、小型の尖底壺と思われる。非常に薄く、もろい胎土の土器である。頸部から口縁部は内湾気味に立ち上がり、肩部のやや下方には2本の平行沈線を持つと思われる。内外面ともナデである。16は厚みのある丸底になると思われる。外面は風化が著しいが、内外面ともナデ仕上げである。17と18は高坏の坏部である。17は口縁部と坏底部との間に稜を持ち、口縁



第 10 图 上野原遺跡 1号・2号掘立柱建物跡 (1/30)

部はやや外反する。口唇部は平らに仕上げている。内外面とも風化が著しいが、外面は縦方向のミガキ、内面はナデである。口唇部とその付近の内面にはススが附着している。18は器壁が薄い土器で、口唇部は丸く仕上げている。内外面ともナデである。

b. 包含層出土の遺物

出土遺物は第9図の19～22である。19と20は甕の底部である。19は裾部は広がらずに平底を呈する。外面はナデと縦方向のハケ目、内面はナデである。20は裾部が外に開き、上げ底を呈する。裾端部は丸く仕上げている。内外面ともナデ調整で、内面には炭化物が附着している。21と22は高坏である。21は坏部で口唇端部は丸く仕上げている。内外面ともナデである。22は脚の裾部で、脚柱部と裾部との間に4つの穿孔をもつと思われる。裾部は「ハ」字状に開き、内面の穿孔下には稜線が見られる。内外面ともナデである。

(2) 時期不明の遺構

a. 掘立柱建物跡：SB (第10図)

黒勢戸遺跡と同様、柱穴の並びを検討し、建物として柱穴が並ぶ可能性をもつものについて2棟を図示する。

1号掘立柱建物跡 (SB1)

調査区中央よりやや西寄りに位置する。長軸をW-7°—Eにとる1間×1間を検出しているが、南北方向に並びが広がる可能性をもつ。柱間は南北が175～178cm、東西が178～194cmを測る。柱穴径は25～30cm、深さ10～20cmである。

2号掘立柱建物跡 (SB2)

調査区東側に位置する。長軸をN-86°—Wにとる1間×2間を検出しているが、南側に柱の並びが確認される可能性をもつ。柱間は南北が140cm、東西が280cmで、柱穴径は20～30cm、深さ10～20cmを測る。

第5節 まとめ

今回の発掘調査では、縄文時代晩期や弥生時代後期終末～古墳時代初頭の土師器等がわずかではあるが出土している。また、上野原遺跡では、弥生土器から古墳時代の土師器へと移り変わる時期の土器を伴う竪穴住居跡が1軒確認された。調査は、周知の遺跡である黒勢戸遺跡と上野原遺跡が立地する台地上を通り抜ける細長いパイプライン埋設箇所を、約1.3kmにわたって本調査と立ち会い調査をまじえて行った。本文では本調査を行った2地点について記述を行ったが、立ち会い調査で出土した遺物も含め簡単にまとめを述べたい。

竪穴住居跡について

上野原遺跡の竪穴住居跡は半分のみの検出にとどまったが、調査区が狭少であったにもかかわらず住居が確認されたことは大きな成果であった。調査期間の都合上、最終遺構検出面となる御池ボラ上面

付近まで重機による掘り下げを行ったことから、住居の上部のほとんどを失ってしまったことは残念であった。

7の甕は口縁部が「く」字形に屈曲し、胴部最大径を上位にもつもので、頸部から口縁部端部に向かって上方にかき上げたハケ目がみられ、頸部に稜をケズリ出している。8の甕の口縁部も同様に縦方向のハケ目調整がみられる。これらの甕は吉本正典氏の宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察¹⁾（吉本1995）の1・2型式期の特徴を備えている。また、15の小型壺は壺の底部が一番尖る時期の器形を呈していると思われる。出土遺物からみると住居の時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭に比定できる。

昭和50年に企業誘致の為に敷地造成工事に伴う発掘調査が行われた上野原遺跡（第1次）は当遺跡の約400m北西に位置する。調査では、貼付刻目突帯の巡る甕を主に出土する5軒の竪穴住居跡が確認されている。貼付刻目突帯付甕の口縁部は屈曲するものは1点のみの出土で、直口及びやや内湾するものがほとんどである。この集落は5～6世紀代の時期が比定され、当遺跡より後出して営まれたものである。

住居の構造についてはややいびつな方形プランで、4本の主柱穴配置が想定される。炉跡は検出されていないが、7の甕の外面に著しくススが付着していることから未調査範囲に炉の存在が推測される。

その他の出土遺物について

縄文土器は、黒勢戸遺跡で晩期の鉢底部が1点と、立ち会い調査箇所でも後期から晩期の土器片が数点出土している。立ち会いの場所は上野原遺跡の南東約200mの地点である（第2図）。黒勢戸遺跡の試掘調査では後期の土器片と土坑状の遺構が確認されていたが、本調査では遺構の検出はできなかった。出土遺物の少なから縄文後・晩期の集落が台地上にあることを根拠付けるには無理があると思われるが、プライマリーな層からの出土遺物であることから台地上に集落が存在する可能性も否めない。

弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物は、上野原遺跡が立地する台地上での出土が中心で、黒勢戸遺跡では出土していない。立ち会い調査箇所（第2図）でも竪穴住居跡出土の甕と同様の調整が施された土器が出土しており、上野原遺跡（第1次）の集落（5～6世紀代）と比べ、やや台地の内部にこの時期の遺物分布が広がることが窺われる。

黒勢戸遺跡では貼付刻目突帯をもつ甕の胴部片が2点出土している。小片であるため時期については断定できないが、上野原遺跡（第1次）で出土している甕とほぼ同時期の年代が推定される。

（参考文献）

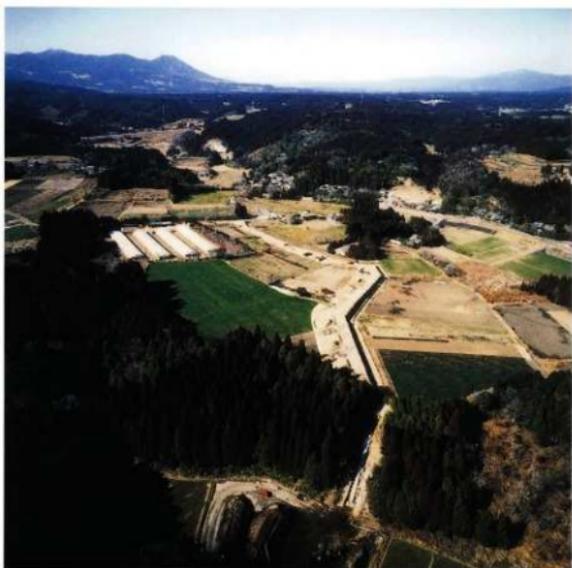
- 1) 吉本正典「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察」『宮崎考古 第14号』1995 宮崎考古学会
- 2) 「上野原遺跡発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書 第22集』昭和55年 宮崎県教育委員会
- 3) 『高崎町史』1990 高崎町史編纂委員会
- 4) 「遺跡詳細分布調査報告書」『高崎町文化財調査報告書 第3集』1992 高崎町教育委員会
- 5) 「榎屋敷第1・2遺跡」『高崎町文化財調査報告書第2集』1990 高崎町教育委員会

第1表 黒勢戸・上野原遺跡土器観察表

遺物 番号	種別	器 部	出土地点	位置 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特長	備 考
				口徑	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	陶文	鉢 底面	Ⅷ層上	(11.0)			風化著しい ナテ	ナテ、炭化物付着	橙	にぶい橙 褐灰	3mm程度の灰白色の小石 2mm以下の灰・黄・褐色・黒色の粒 1mm以下の乳白色粒、半透明光沢粒	上げ底
2	土師器	甕 胴部	Ⅷ層				貼付斜角突帯 横・斜方向のハケ目 黒変	斜方向のハケ目		にぶい橙 黄褐	2mm以下の褐色粒 1mm程度の透明・黒色の光沢粒 1mm以下の黒褐・灰色の粒	
3	土師器	甕 胴部	Ⅷ層下				貼付斜目突帯、ナテ	ナテ、黒変、一部風化	明赤褐	明赤褐 褐灰	1.5mm以下の褐色粒 1mm以下の透明光沢粒、灰色粒	
4	土師器	坏 体部	Ⅷ層				横方向のミガキ	ナテ、黒変	橙	橙 褐灰	1mm程度の半透明光沢粒、灰・ 横・黒色の粒 微細な白・灰色の粒	
5	土師器	鉢 口縁～ 胴部付	Ⅷ層				ヨコナテ、斜方向 のハケ目の後ナテ	ヨコナテ、斜方向のハケ目 の上をヨコナテ、黒変	橙	黄褐 灰黄褐	1mm以下の黒色光沢粒 微細な黒褐・灰褐色の粒、乳 白色光沢粒	
6	土師器	鉢 口縁	Ⅷ層	(15.5)			ヨコナテ	ヨコナテ、やや風化	橙	橙	5mm程度の黒褐色の小石 1.5mm以下の黒褐色色粒 1mm以下の乳白色粒	
7	土師器	甕 口縁～ 胴部	SA				ヨコナテ、横方向のナテ、 胴部くびれ部を縦方向にケス リ出した後縦筋ナテ、ナテ、 スス付着、器上の磨ぎ目	ナテ、横方向のナテの 後縦方向の指ナテ、黒 変、指頭痕、工具痕	にぶい橙 黒	褐灰 橙	3mm以下の白・灰・茶・横・ 黒色の粒 2mm以下の透明光沢粒	
8	土師器	甕 口縁	SA				ナテ、ハケ状工具に よる縦方向のナテ、 粘土の磨ぎ目	横方向のナテ、黒変	浅黄橙 黄橙	にぶい黄橙 褐灰	2mm以下の褐・灰・褐色の粒、 透明光沢粒 1mm以下の白色粒	
9	土師器	甕 口縁	SA				工具によるナテ、ナテ、 粘土のたるみ、粘土の磨ぎ目	工具によるナテ、 ナテ、粘土のたるみ	にぶい黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒・灰・黒褐色の粒、 黒色・透明光沢粒	
10	土師器	甕 口縁	SA				ナテ、黒斑	ナテ、指頭痕、黒斑	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 黒	2mm以下の褐・灰・横・暗褐・ 乳白色の粒 1mm以下の透明・黒色の光沢粒	
11	土師器	甕 胴部	SA				ナテ、スス付着	ナテ	黄橙 黒	にぶい黄橙 黒	2～4mm程度の横・灰色の小石粒 2mm以下の灰・黒色の粒 1mm以下の白・乳白色の粒	
12	土師器	甕 胴部付	SA				縦方向のハケ目、ナテ	ナテ、黒変	にぶい黄橙	灰黄褐	3mm以下の暗灰・黒・茶・灰・ 横・乳白色の粒	
13	土師器	甕 胴部	SA				ナテ、スス付着	ナテ、黒変	明赤褐 黒褐	灰黄褐	2mm以下の灰・黒・白色の粒、 透明光沢粒	
14	土師器	小型甕 口縁	Ⅷ層	(11.0)			ナテ、風化気味	ナテ、風化気味	浅黄橙	浅黄橙	1mm程度の黒色光沢粒 1mm以下の灰・灰・乳白・橙 色の粒 きめ細か	肩一帯は 尖底
15	土師器	小型甕 底面	SA				ナテ、2本の平行沈線 黒斑、風化気味	ナテ、風化気味	浅黄橙	橙	1mm程度の透明光沢粒 1mm以下の黒・灰・乳白・橙 色の粒 きめ細か	
16	土師器	甕 底面附近	SA				ナテ、風化気味	ナテ、指頭痕	橙	浅黄橙	3～5mm程度の褐色小石粒 1.5mm以下の灰・褐色の粒、黒色光沢粒 1mm程度の乳白色粒、乳白色粒	
17	土師器	高坏 口縁	SA				ナテ、スス付着、黒変、 縦方向のミガキ、風化著しい	ナテ、風化著しい	橙	明赤褐 褐灰	1mm以下の乳白・黒色の粒 微細な灰色粒、半透明光沢粒	
18	土師器	高坏 口縁	SA				横方向のナテ	横方向のナテ	灰黄褐	灰褐	微細な横・暗褐色の粒	
19	土師器	甕 底面	Ⅷ層	(6.8)			縦方向のハケ目、ナテ	ナテ、黒変	橙	にぶい橙 黒褐	1.5mm以下の灰・横・乳白・ 暗褐色の粒 3mm以下の乳白・褐色の粒	
20	土師器	甕 底面	Ⅷ層	(7.8)			ナテ、指頭痕	ナテ、炭化物付着	にぶい黄橙	黒	2mm以下の橙・灰・乳白・暗 灰色の粒、透明光沢粒 3mm程度の灰色粒	上げ底
21	土師器	高坏 口縁	Ⅷ層	(28.0)			ナテ	ナテ	黄橙 浅黄橙	黄橙	1mm程度の透明光沢粒 1.5mm以下の灰・黒・横・橙・ 白色の粒	肩一帯は 4稜の逆し
22	土師器	高坏 底面	Ⅷ層	(15.5)			ナテ、風化気味、黒変	ナテ	黄橙	黄橙	2mm以下の横・黒色の粒、透明光沢粒 1mm以下の灰・横・茶・黒色の粒、 黒色光沢粒	



黒勢戸・上野原遺跡遠景



黒勢戸遺跡遠景



黒勢戸遺跡 表土剥ぎ



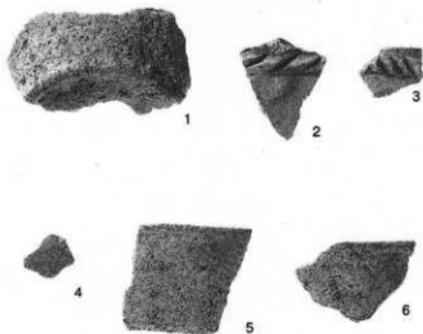
黒勢戸遺跡 土層断面 (断面①)



黒勢戸遺跡 遺構検出状況



黒勢戸遺跡 掘立柱建物跡



黒勢戸遺跡 出土土器



上野原遺跡 作業の様子



上野原遺跡 遺構検出状況

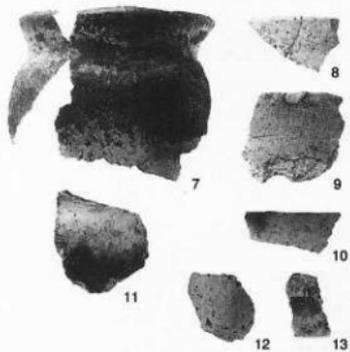


上野原遺跡 竪穴住居跡遺物出土状況

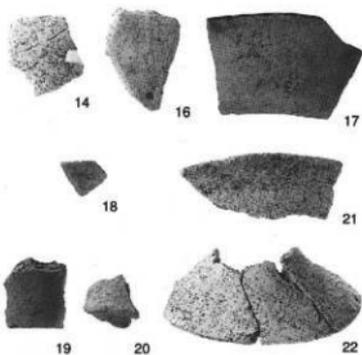


15

上野原遺跡 竪穴住居跡
出土土器①



上野原遺跡 竪穴住居跡出土土器②



上野原遺跡 竪穴住居跡及び包含層出土土器

報告書抄録

フリガナ	トラクエ・エノキダ		クロセト・カミジノバル			
書名	虎崩・榎木田遺跡		黒勢戸・上示野原遺跡			
副書名	国営都城盆地農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	第1集					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第41集					
編集者名	吉本正典 高橋浩了					
発行期間	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒890-0212 宮崎県佐土原町大字下那珂4019番地					
発行年月日	2001年3月31日					
フリガナ						
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
トラクエ エノキダ 虎崩・榎木田 遺跡	北諸県郡山田 町大字中霧島	31° 47' 50"	131° 10' 20"	1993.8.17 ～ 1993.10.22	230㎡	国営パイプ ライン敷設 工事
クロセト 黒勢戸遺跡	北諸県郡高崎 町大字大牟田 字黒勢戸	31° 52' 14"	131° 03' 06"	1995.11.11 ～ 1995.12.25	1,040㎡	
カミジノバル 上示野原遺跡	北諸県郡高崎 町大字大牟田 字上示野原	31° 52' 00"	131° 03' 36"	1995.12.26 ～ 1996.1.16	200㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
虎崩・榎木田遺跡	散布地	縄文	「埋甕」遺構	縄文土器・石器	埋葬遺構の 確認	
黒勢戸遺跡	散布地	縄文 古墳	柱穴群	縄文土器 土師器		
上示野原遺跡	集落	弥生後期終末 ～古墳	竪穴住居跡1 柱穴群	土師器		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第41集

**虎崩・榎木田遺跡
黒勢戸・上示野原遺跡**

国宮都城盆地農業水利事業に伴う発掘調査報告書(1)

2001年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎県佐土原町大字下藤河4019番地
Tel 0985(36)1171 Fax 0985(72)0660

印刷 有限会社富士写真印刷

〒880-0212 宮崎県佐土原町
Tel 0985-74-2179
